

粕屋町文化財調査報告書第 38 集

内橋坪見遺跡 3 次

2015

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、民間開発に伴い、平成26年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町大字内橋字辻寺に所在する内橋坪見遺跡3次調査の記録です。

調査地周辺は、奈良時代を中心とした古代の遺跡が多く存在しています。隣接地には、糟屋郡最大級規模の掘立柱建物や大宰府式鬼瓦が出土した内橋坪見遺跡1次調査地をはじめ、精巧で大型の横板組井戸と貴賓専用の精美な土師器が見つかった内橋牛切遺跡や、多々良川の河口で物資集積施設として栄えた多々良田遺跡などが周囲にあります。さらに大宰府と都を結ぶ官道が調査地近辺を通過していることからみましても、海上・河川・陸上交通が交わる重要な地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、奈良時代の官衙関連遺跡に伴う土塁状遺構が発見されたことは、今回の調査における大きな成果であったといえるでしょう。しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎません。遺跡がどのような性格であったのかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様にも心から謝意を表します。

平成27年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 大塚 豊

目次

01 経過・位置と環境	08 竪穴住居
01 調査に至る経過	13 溝・欄
02 調査体制	18 土塁状遺構
02 地理的環境	19 道路状遺構
04 歴史的環境	19 包含層
	25 瓦
05 調査成果	29 おわりに
05 調査概要	
05 旧石器	33 図版
07 縄文土器	
07 縄文の石器	

内橋坪見遺跡周辺の調査遺跡

内橋坪見遺跡1次 『内橋坪見遺跡概要報告書』粕屋町教育委員会2013

本報告書近年刊行予定

内橋坪見遺跡2次 近年刊行予定

内橋坪見遺跡3次 本書

内橋牛切遺跡 『内橋牛切遺跡』粕屋町教育委員会2013

内橋登り上り遺跡第1地点 『内橋登り上り遺跡』粕屋町教育委員会1994

内橋登り上り遺跡第2地点 『内橋登り上り遺跡第2地点』粕屋町教育委員会1997

内橋登り上り遺跡第3地点 『内橋登り上り遺跡第3地点』粕屋町教育委員会1997

内橋登り上り遺跡第4地点 『内橋登り上り遺跡第4地点』粕屋町教育委員会2001

内橋鏡遺跡 『内橋鏡遺跡』粕屋町教育委員会2015

発行	粕屋町教育委員会
調査起因	宅地造成
現地調査	平成26年5月12日～平成26年7月25日
整理調査	平成26年7月28日～平成27年3月31日
使用方位	国土地理院Ⅱ系(世界測地系)
遺構実測	福島日出海・児玉駿介
遺構/遺物撮影	西垣彰博
遺物実測	福島日出海・新宅信久・児玉駿介
製作	高橋幸作
執筆	福島日出海・新宅信久・西垣彰博・児玉駿介
編集	西垣彰博

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて取蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

江戸時代に貝原益軒が記した「築地」の地名は、調査区の小字名「辻寺」と表記を変えて今に残る。郡と大宰府を結ぶ古代官道推定線が調査区の横を通り、当時の博多湾内海に面した多々良込田遺跡からも近い場所に位置している。



第1図 内橋坪見遺跡3次位置図 (1/25000)

調査に至る経過

内橋坪見遺跡3次調査は、福岡県糟屋郡粕屋町大字内橋字辻寺248-4、254-1において、民間開発に伴う宅地造成が計画されたことに起因する。

平成25年12月17日に、株式会社みなもと不動産より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。

申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である内橋坪見遺跡に位置し、奈良時代の長舎型建物を検出した1次調査地（1次調査後に開発計画が中止されたため、遺構は地表

下に残っていた）に該当している旨を回答した。

株式会社みなもと不動産と協議を重ねた結果、1次調査区全域と、土塁状遺構、区画溝、櫓等の重要遺構については盛土工法による現地保存を行うことで合意した。それ以外の遺構については、工法計画上遺跡の破壊が免れないため、切土が及ぶ道路側の範囲を調査対象として記録保存の発掘調査を実施し、終了後に造成工事に着手することにした。

発掘調査は平成26年5月12日から平成26年7月26日の期間において実施した。報告書作成に係る出土遺物整理

作業は、平成26年7月28日から平成27年3月31日の期間において実施した。

出土遺物及び図面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

なお、調査期間中は、長崎外国語大学木本雅康教授、島根大学大橋泰夫教授、岡山理科大学亀田修一教授、福岡大学武末純一教授・桃崎祐輔教授、日本歴史資料館小池史哲氏、九州歴史資料館杉原敏之氏より貴重なご意見・ご指導をいただいた。また、地域住民の方々をはじめ、株式会社みなもと不動産の皆さまには、調査の趣旨にご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。ここに記して

感謝申し上げます。

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は14.12km²と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の西王寺山系から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区分される。東側の三郡山系、犬鳴山系を源とする3本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいるが、山地から舌状に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。

調査体制

平成26年度

調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 大塚豊

教育委員会事務局次長 関博夫

社会教育課長 中小原浩臣

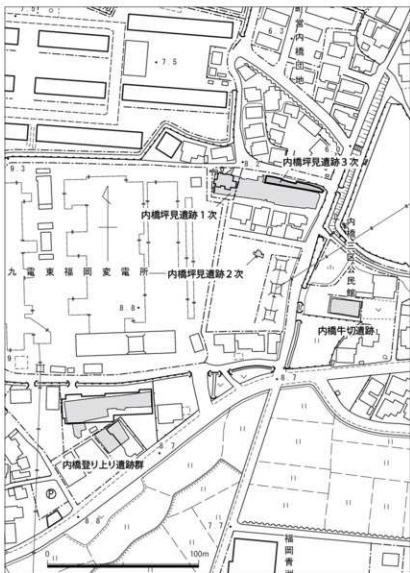
社会教育課文化財係主幹 新七信久

同係長 西垣彰博

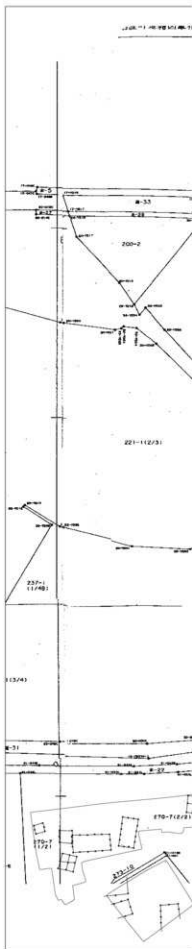
同係嘱託職員

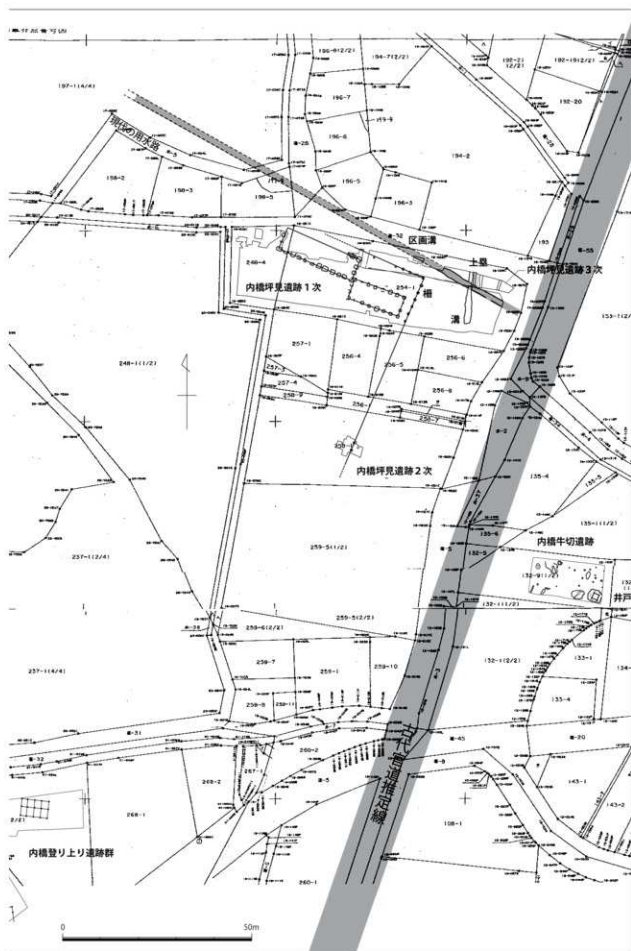
池田拓、児玉駿介、高橋幸作、福島日出

海（調査・報告書担当）、松永メイ子



第2図 内橋児童遊路3次位置図(1/2500)





第3図 内橋坪見道跡3次周辺図(1/1000)

調査成果

調査概要

調査区は、東西に伸びる舌状丘陵頂部の北側に位置している。今回調査を行ったのは、当初計画されていた住宅建設工事範囲の約240㎡である。

調査区は丘陵が北側に傾斜し沖積地へと続くあたりの落ち際に位置している。そこは、丘陵の南側に遺跡の主要部が広がる想定されていることから、中心からやや外れた縁辺部に相当しよう。

旧地形は緩やかに北東に向かって傾斜していて、高所にある南側と西側は削平の影響で遺構密度が薄く、遺構等はかなり削られ消失しているようである。

検出された特徴的な遺構は、1次調査で確認された、周辺茶地側に沿う大型掘立柱建物跡を圍繞する溝と櫓をはじめ、その後、正方位に築き直されたであろう「菜地」と推定される土塁状遺構と溝（無溝）が追認された。また、新たに土塁の北側に沿って両側に側溝を備えた道路状遺構の一部も検出された。

主要な遺物としては、旧石器時代のナイフ形器と細石器の資料をはじめ、古墳時代中期と考えられる亀甲状の滑石製未成品、奈良時代の黒土器、円面硯が出土した。また、古代から中世にかけての緑釉陶器や輸入陶磁器が得られており、いずれも貴重な資料となった。

なお、発掘調査を実施した深さは、造成工事の切土が及ぶ範囲とし、それより深い部分と土塁状遺構・区画溝・櫓等の重要遺構については現状保存とした。

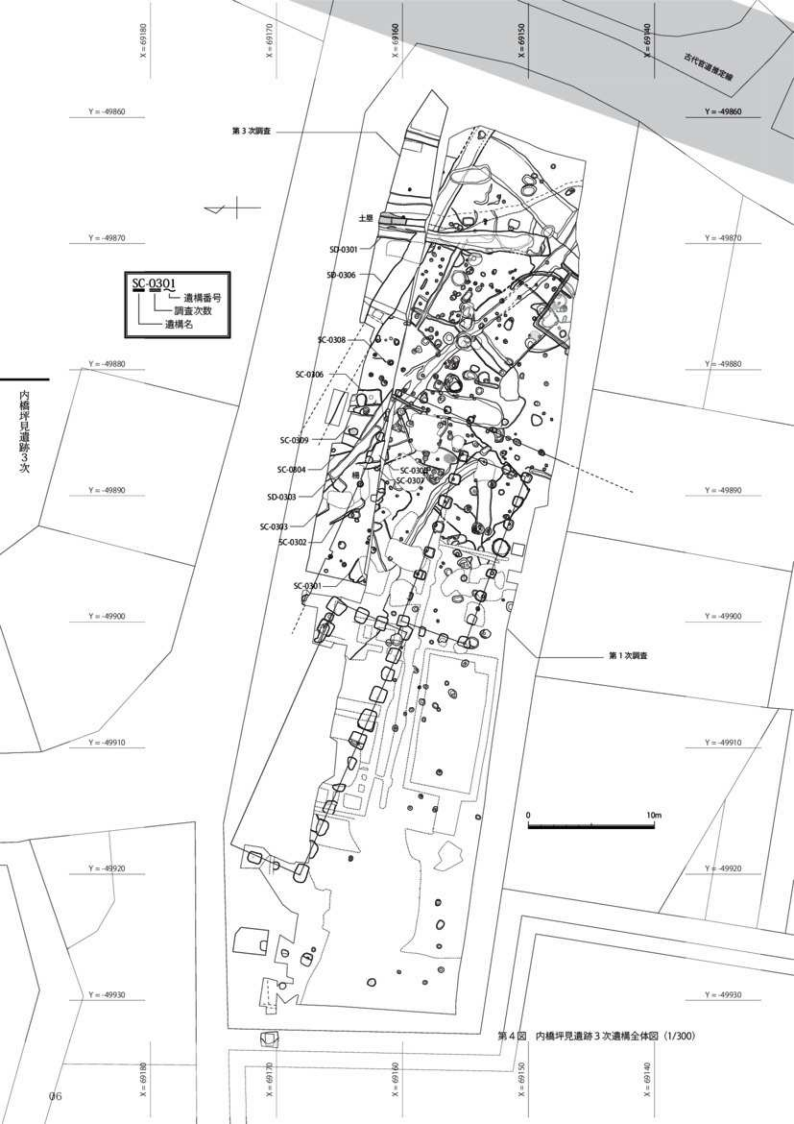
旧石器 (第5圃)

全12点の資料は、包含層から遊離したもので、剥片を除いた7点を提示する。

1は水晶製の小形ナイフ形器で、一側縁加工の切出し状を呈し、全長2.2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmを測る。原材は透明度の高い水晶の六角形を呈した結晶の側部平坦面を打面とし、2度の剥離による打面調整を施した上で、横長の薄い剥片を剥ぎ取って素材とする。その後、剥片端部の湾曲ライン上にプランティングを施して一側縁加工のナイフに仕上げている。刃部は打面右側に生じた1次剥離面の縁辺を利用し、形状的には切出し形に近い。2は赤色メノウ製の断面が三角形を呈した小形の尖頭状石器で、全長2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmを測る。原材は厚みのある方形状と思われ、その稜線を中心線に設定して両側を剥ぎ取り、両側に平坦面を作り出す。それは、平坦面を形成するための自然面の除去と考えられる。次に、基部は自然面の除去を兼ね3回ほど調整加工を行った上で打面を作り、角の稜線を中心に鋭意意識して打撃を加え、基部に厚みのある断面三角形の素材剥片を取る。形状は二等辺三角形で先端が鋭く、厚みのある基部の尖頭状を呈す。最後に、稜線左側の平坦面に浅い調整加工を施して全体を仕上げる。また、その形状や加工等は角錐状石器に通じる。3は黒曜石製の断面形が台形を呈した両側縁加工石器で、切出形ナイフ形器の基部の可能性もある。しかし、現状では器種不明のため素材剥離の方向に合わせて図示する。全長1.6cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。素材は打面調整した厚手の石刃状剥片で、両側縁から粗

い急角度の加工を施し、断面が台形状のしっかりした基部に仕上げる。ここでは形状と表面風化の状況から旧石器と判断した。4は黒曜石製細石刃核の打面再生剥片で扇状形を呈し、全長2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.5cmを測る。まず、素材の上面を大きく剥ぎ取り平坦な作業面を確保する。次に、素材上面を剥ぎ取った同一方向から作業面に対し2回の剥離をもって打面を形成、最低5回の細石刃剥離により細石刃を確保する。その後、再び細石刃剥離面の中央付近に打撃を加え、厚さ0.5cmの削片として剥ぎ取り打面の再生を図る。原材の黒曜石は僅かに灰色を帯びており、同一個体の剥片から円環と判明。5は黒曜石製の細石刃核で稜状を呈し、全長2.0cm、幅1.3cm、厚さ1.2cmを測る。全体の1/3に自然面が残る黒曜石の小角礫を使用する。両側面ともに下方から粗い整形加工を施すが、左側は自然面が多く残る。作業面は自然面を多く残すが、前面を側面からわずかに調整し打面を形成。正面には3条の細石刃剥離面を残す。打面には正面の細石刃剥離面に対応した頭部調整の小剥離が観察される。6・7は黒曜石製の細石刃である。6は全長1.0cm、幅0.6cm、厚さ0.1cmを測るが上面は欠損する。形状は末端が幅広となり背面上に2条の稜線が観察される。7は全長1.5cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmを測るが上端部が欠損する。形状は側面が緩やかな弧を描き、断面は厚みのある三角形を呈し、中央付近に1条の稜線が位置する。

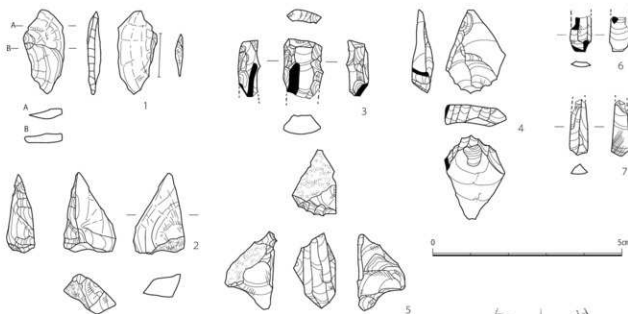
以上の石器群は、ナイフ形器群と細石器群の二群に区分されよう。まず、前者は1水晶製の小形ナイフ形器を基本とし、2尖頭状石器と3の両側縁加工石器を加えた一群を想定する。ナイフ形石



SC-0301
 ┌── 遺構番号
 │── 調査次数
 └── 遺構名

内橋坪見遺跡3次

第4図 内橋坪見遺跡3次遺構全体図 (1/300)



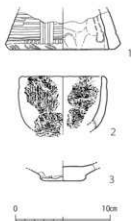
第5図 旧石器実測図(1/1)

器は小形で打面調整された横長不整剥片を素材とする一側縁加工だが、打面側は調整痕が刃遺しの状態が残るため結果、二側縁加工の切出し状を呈す。それにメノウ製の小形尖頭状石器と黒曜石製の両側縁加工石器が加わるもので、イメージとしてはナイフ形石器、角錐状石器、切出し形ナイフ形石器といういずれも小形の個性的な一群である。石材も、水晶、メノウという非黒曜石の在地系に黒曜石が加わる。統て、後者の細石器群として4打面再生剥片は、形状や大きさ、技術的な面から野岳・体壇型の細石刃核関連と考えられ、原材の黒曜石は僅かに灰色がかった円礫を用いる。5の細石刃核は黒曜石の小角礫を使用したもので、色調は黒色を呈し4とは時間的前後関係にあらう。よって、水晶製小形ナイフ形石器の一群は、A T 降灰以後の比較的古い時期と考えられる。その後の空白期間を経て、野岳・体壇型の細石刃核の時期、最後に小角礫を使用した小ぶりの細石刃核の時期という2段階の経過を想定する。

縄文土器(第6図)

いずれの資料も本来の包含層から遊離したもので、上部の包含層や後世の遺構の覆土中に混入する。

1は深鉢の脚台で底径12.2cm、器壁厚は1.1cmを測る。色調は棕色、胎土に粗い石英粒含み、焼成は甘く軟質である。形状はハの字に開き、調整は外面に幅広で横位の条痕文を施した後に縦位の条痕文を加える。脚端部にはその湾曲面に沿ってLRの縄文を回転押捺するが、施文が雑なため条や節が見れる。内面を指ナデによって仕上げる。2は粗製の鉢で口径8.4cm、器壁厚0.7cmを測る。色調は淡茶褐色で黒斑が混じり、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。形状は口縁部が丸く、直立した口縁部から丸底風の底部へと続く。口縁部付近は内外面を指オサエによってくびれさせ頸部風に仕上げる。調整は外面に縦位の条痕文、底部は丸い形状に沿って時計回りに横位の条痕文を施し、内面に横方向のナデを加える。3は粗製鉢の底部で底径4.8cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は茶褐色、胎土に少量の砂粒が混じるとともに植物の種子や断片がかなりの量で混在する。焼成は甘い。形状は底部が弓盤状の厚底を呈し、調整は外面をへらによるオサエ、内面をナデにより仕上げる。また、内面が焦げつきのため黒色を呈す。



第6図 縄文土器実測図(1/4)

縄文の石器(第7図)

1は黒曜石製凹基無茎の打製剥片器で全長1.9cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。素材は透明度が高い黒曜石の幅広縦長の剥片を使用するもので、中央に走る稜線を中軸線とし、基部に左右二股で幅広の脚部を設け、稜線上の先端部は欠ける。加工は基部の内側を背面と主要剥離面の両側から細かに削り、抉りの部分は最後に整える。2は黒曜石製の凹基無茎の打製片で基部が脚部先端から0.3cmほど内湾する。両面加工の細かな剥離は、先端や脚部の先まで施され扁平で鋭利な作りとなる。3は黒曜石製の牙状尖頭器か。全長2.3cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。素材は旧縄文層の観察から、基部方向より剥がされた少し厚手の剥片で、背面と主要剥離面の両面をやや粗く整形したものである。4は黒曜石製の石核で全

長2.5cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。原料は黒曜石の角礫を使用し、未調整の自然面から縦長で下端の幅が広い剥片を剥ぎ、続いて右側面から連続的に幅広いの剥片を得ており、打面は自然面のまま打点移動するという剥離法である。

時期としては、縄文土器は1が北久根山式、3は黒川式あたりに相当することから、概ね縄文時代後期中葉と晩期後半頃の所産であろう。石器は1剥片礫や2石礫、4石核もそのあたりに納まるものと考えたい。

竪穴住居

調査区の中央から西側の範囲内に9軒を確認したが、切り合いや削平によりいずれも一部を検出したに過ぎず、1次調査図面と照合しはじめて確認されるものもあった。

1号竪穴住居 [SC-0301] (第9回)

全体が削平されており、床面までの深さは約15cm。1次調査の第7号竪穴住居跡の北西コーナーに相当しよう。平面プランは方形と考えられる。

第1号竪穴住居出土遺物 (第9回)

1は長頸壺の口縁部で口径7.0cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は茶褐色、胎土

に砂粒を含み、焼成は甘く軟質である。形状は口縁部が外反気味に立ち上がり、その上部は内湾気味となる。おそらく、頸部は直線的となり扁球形の胴部へ続くと思われる。調整は観察できない。

第2号竪穴住居 [SC-0302] (第10回)

全体が削平されており、西側壁面の一部が検出され、床面までの深さは約20cm。平面プランは方形と考えられ、南西のコーナー部分に相当し隅壁溝をとまろう。

第2号竪穴住居出土遺物 (第10回)

1は甕の口縁部で口径12.7cm。器壁厚0.5cmを測る。色調は灰褐色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は甘く軟質である。形状は口唇部が尖り気味で口縁部が強く外反する。調整は観察できない。

第3号竪穴住居 [SC-0303] (第10回)

全体が削平されており、床面までの深さは約10cm。平面プランは方形と考えられ、南のコーナー部分を確認したものと考えられる。北側は調査区外へと続き東側は攪乱に切られる。

第3号竪穴住居出土遺物 (第10回)

2は高坏の脚部で器壁厚1.3cmを測る。色調は茶褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は甘くやや軟質である。形状は裾が

ハの字に広がる厚手のもので、脚部が上方に伸びて、有段の坪部がのるタイプと考えられる。調整は外面に縦位のハケ目を施し、内面の上方はヘラオサエ、下方には横位のヘラミガキを加える。

第4号竪穴住居 [SC-0304] (第11回)

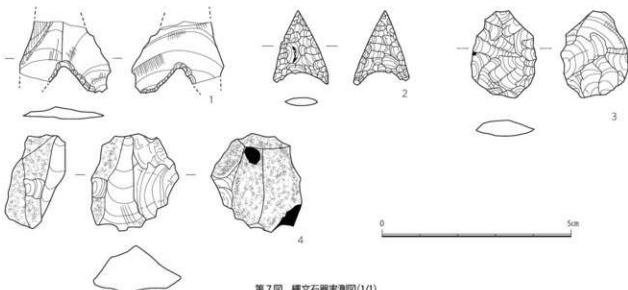
全体が削平されており、ピットを1基検出している。床面までの深さは約20cm。北側は調査区外へと続き、南側は第3号溝、東側は第9号竪穴建物によって切られる。平面プランは方形と考えられる。

第5号竪穴住居 [SC-0305] (第11回)

全体が削平されており、床面までの深さは約20cm。1次調査時に竪穴住居跡の南西コーナーが検出されており、その北側に相当する。平面プランは方形と考えられる。

第5号竪穴住居出土遺物 (第12回)

1は複合口縁壺の口縁部で口径16.8cm。器壁厚0.4cmを測る。色調は明黄褐色、胎土に粗い砂粒を多く含み、焼成は甘く軟質である。形状は口縁部が大きく外反し全体に短い。複合口縁の有段部はしっかり突出し、外側から突帯状に粘土を貼り付けて整形する。調整は観察できない。2は甕の底部で器壁厚0.5cmを測る。色調は黄褐色、胎土に粗い石英粒を多く含み、焼成は甘く軟質である。形状



第7回 縄文土器実測図(1/1)

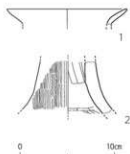
SC-0301
 └─ 遺構番号
 └─ 調査次数
 └─ 遺構名



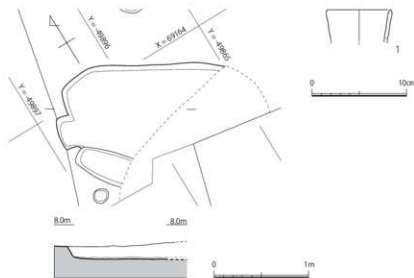
調査成果

第8図 竪穴式住居・溝・楕平面図 (1/100)

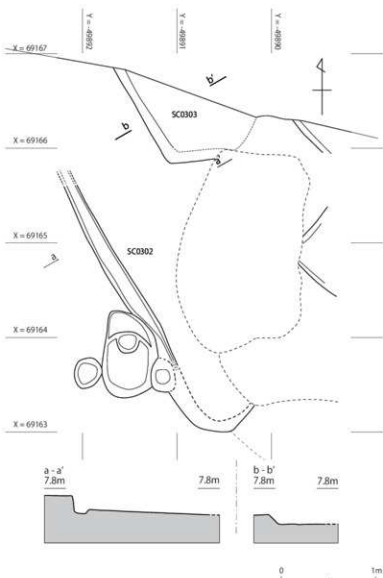
は胴部が球形と考えられる。底部は丸底ではなく緩やかなカーブから平坦面を描くが、その境界に当る稜線は不明瞭ながら径7cmほどの平坦面となろう。調整は外面にハケ目を施した後に丁寧にナデ直し、内面をヘラ削りにより仕上げる。底部にはヘラ書きの細い沈線が絵画状に描かれたものがある。その順序は中央から下部にかけ右上がりの斜線3本を引く。次に、平行線を3本描くがいずれも中央の線が長い。その後に横位の中央線から下部に縦線1本を引く、最後に周囲を楕円状に囲む。ただし、囲み線は上方が開いた状態である。その位置や形状から木の葉文と想像するが、推測に描かれている。3は器台の脚部で底径15.0cm、器壁厚1.1cmを測る。色調はにごった灰白色、胎土に砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質である。形状は脚部がハの字状に開き、端部は丸く納まり内側に若干突出する。調整は外面に縦位のハケ目を施し、内面を横位のハケ目により仕上げる。4は器台の受部以下の資料で、底径10.4cm、脚部の器壁厚0.7cmを測る。色調は茶褐色、胎土は良好ながら焼成はやや甘い。形状は脚部がラッパ状に強く開く。調整は外面、受部及び内面ともに粗いヘラミガキを施す。5は器台の受部以下の資料で、底径8.8cm、脚部の器壁厚0.6cmを測る。色調は褐色、胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや甘く軟質である。形状は脚部がラッパ状に強く開く。調整は外面、受部及び内面ともにヘラミガキを施す。6は器台の胴部で器壁厚1.2cmを測る。色調は暗褐色、胎土に粗い砂粒を多く含み、焼成は良い。形状は受部がロート状に外反し、脚部は比較的緩やかに裾が広がる。調整は外面全体に指ナデを加え、くびれ部付近には指オサエを施す。内面を粗いハケ目の後にナデにより仕上げる。



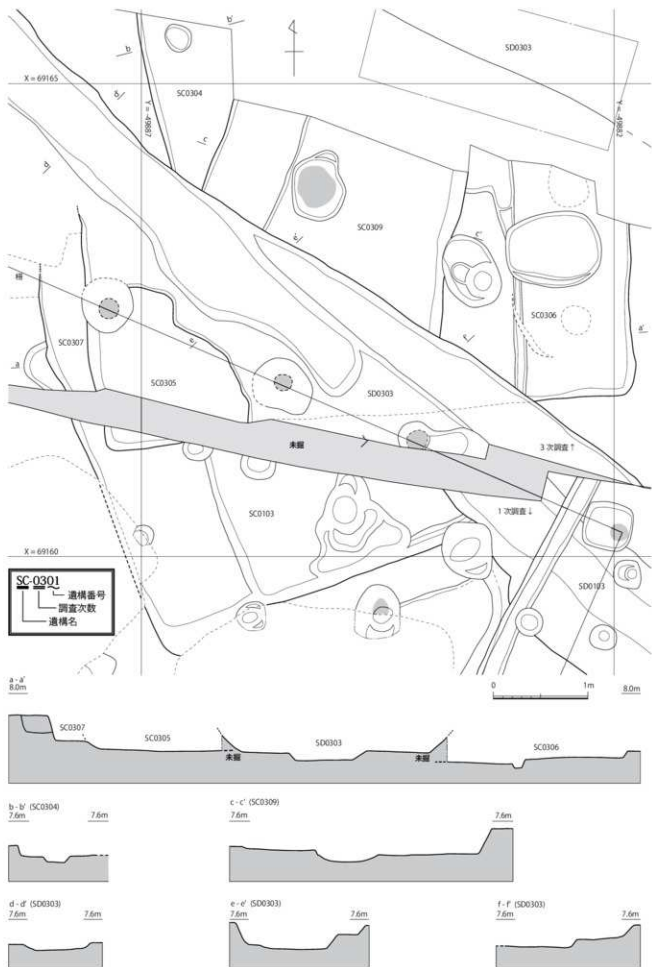
第10図 第2号・第3号竪穴住居実測図(1/40)、第2号・第3号竪穴住居出土土物実測図(1/4)



第9図 第1号竪穴住居実測図(1/40)、第1号竪穴住居出土土物実測図(1/4)



第10図 第2号・第3号竪穴住居実測図(1/40)、第2号・第3号竪穴住居出土土物実測図(1/4)



第11図 第4号～第7号・第9号竪穴住居実測図(1/40)

第6号竪穴住居 [SC-0306] (第11回)

床面までの深さは約25cm。北側は調査区外へ伸び、西側は第9号竪穴住居によって切られるが、南東のコーナー部分を検出している。東側壁面は北側へ1.8m以上、西壁は西側へ3.7m以上伸び、平面プランは方形と考えられる。一部にベッド状遺構と周壁溝が確認できる。

第6号竪穴住居出土遺物 (第12回)

7は器台の脚部で底径19.0cm、器壁厚1.3cmを測る。色調は暗茶色、胎土に砂粒を含み、焼成は良い。脚部は内厚で

ハの字に開き、端面内面が僅かに窪んだラインとなる。調整は外面にハケ目を施した後にナデ消し、内面を横位のハケ目により仕上げられる。

第7号竪穴住居 [SC-0307] (第11回)

1次調査で確認していた第3号竪穴住居の一部であり、西側壁面の北側の続きを確認した。床面までの深さは約20cm。ただし、攪乱によって北端は削られており、東側は第5号竪穴住居に切られる。

第8号竪穴住居 [SC-0308] (第13回)

削平により残存状況は極めて悪い。1次調査で検出した第4号竪穴住居跡との関係からその一部と判断した。

第9号竪穴住居 [SC-0309] (第11回)

西壁側が削平されており、床面までの深さは約25cm。第4・6号竪穴住居を切っている。ベッド状遺構を配し、が跡は径が68cm、深さ8cmの円形を呈し、底部を中心に円形の焼土面が残る。

第9号竪穴住居出土遺物 (第12回)

8は裏の脚部で最大径30.2cm、器壁厚1.0cmを測る。色調は灰褐色、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良い。形状は球形の脚部に斜方向の刻目を付す1条のコの字突帯を貼付ける。調整は外面に縦位の粗いヘラナデを施す。内面を縦位の密なハケ目により仕上げられる。9は高環の口縁部で口径28.6cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は茶褐色、胎土は良好で、焼成は甘く軟質である。形状は口縁部の屈曲部から緩やかに外反し、口唇部を丸く納める。口縁部は反りが弱く上部にやや伸びる。調整は観察できない。

石製品

10は滑石製有溝石鐮で全長2.8cm、幅1.3cm、厚さ0.8cmを測る。外形は断面八角形を基本として縦方向に削りながら整える。整形は横位の溝が先で縦位の溝を後に彫り込む。他に長さ、厚さが近似する滑石が共存しており有溝石鐮の素材と思われ、製作した可能性がある。

竪穴住居の時期については、遺構自体が断片的で、遺物の量も少なく時期の比定には困難を伴う。住1-1長頸壺は内湾気味の口縁部を呈す。弥生時代後期終末。住2-1裏は口唇部がシャープで口縁部が強く外反する畿内系土師器。古墳時代前期(初頭)。住3-2高環は茶褐色の厚手の作りに粗い縦位のハケ目。弥生時代後期後半~終末。住5-1複合口縁部は短い口縁部が強く外反。住5-2裏は球形胴部に底部が僅かに平坦。住5-4・住5-5器台は受部と脚部がともに開く畿内系土師器。古墳時代前期(初



第12回 第4号~第7号・第9号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4, 1/1)

頭。住6-7器台は筒形。弥生時代後期終末。住9-8實は球形の胴部に粗い斜方刻目のコ字突起。住9-9高環は口縁部の反りが弱く上方に伸びる。弥生時代後期終末。よって、1号住居=弥生時代後期終末、2号住居=古墳時代前期(初頭)、3号住居=弥生時代後期後半~終末、5号住居=古墳時代前期(初頭)、6号住居=弥生時代後期終末、9号住居=弥生時代後期終末とそれぞれに位置付けられる。

溝・柵

(溝は1次調査と同じ道幅番号を付している)

第3号溝 [SD-0303] (第8・11図)

調査区西側を横切る溝で、二段掘りの形状を呈し、1次調査時に検出されており北西に続く。方位はN-45°-Wを示す。幅は約70cm~1.4m、深さは約25cmを測り、第4~6と8・9号竪穴住居を切る。遺物は弥生時代後期後半と古墳時代前期末~中期前半のものが出土しているが、弥生時代後期終末~古墳時代前期初頭の竪穴住居を切っており、この溝は後者の時期に相当しう。

第3号溝出土遺物 (第14図)

1は短頸壺の胴部で最大胴部径12.8cm、器壁厚1.3cmを測る。色調は淡黄褐色。胎土に粗い砂粒を多く含み、焼成は良い。形状は扁球形の胴部と直立気味の口縁部、底部はやや小ぶりの平底が中央が若干突出すると考えられる。調整は外面に横ナデを施すが、内面は観察できない。2は鉢の口縁部で口径17.8cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は淡茶褐色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良い。形状は大きく開く口縁部に口唇部を丸く納める。調整は観察できない。3は高環の口縁部で器壁厚0.5cmを測る。色調は淡褐色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は甘く全体に艶い。形状は口縁部が大きく内湾し、豊前地域に見られる特徴的な形態である。調整は観察できない。4は鉢の口縁部で器壁厚0.4cmを測る。色調は暗褐色。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良い。形状は胴部が緩やかに内湾し、口縁部は



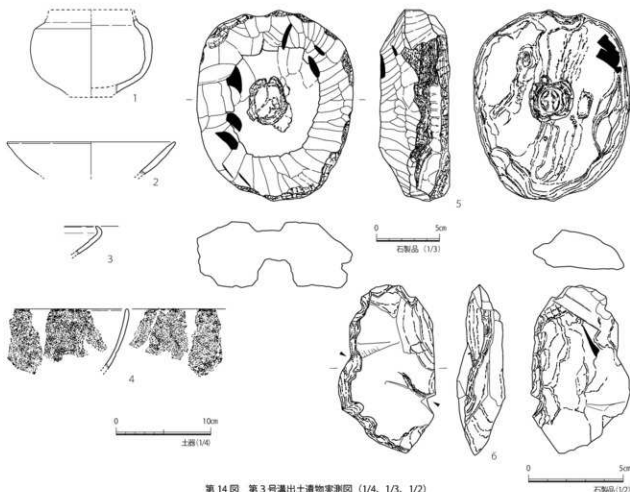
第13図 第8号竪穴住居実測図(1/40)

直立気味で全体を俣手に仕上げる。調整は外面に斜位のハケ目を施した後にナデを加え、内面も同様に斜位のハケ目を施す。口縁部は内外ともに横ナデにより仕上げる。

石製品

5は滑石製未成品で亀甲状石と称される⁽¹⁾。全長15.2cm、幅12.3cm、厚さ5.2cmを測る。形状は亀甲状を呈し、表面中央部に縦4.0cm、横3.0cm、深さ1.1cmの隅丸方形に孔を設ける。孔の断面は逆台形状を呈し、底には工具痕のような浅い窪みが位置する。孔の周辺は形状にあわせ亀甲形の平坦面を残し、その周囲を幅0.5~1.0cmの幅で斜め下方に削り取り、削り痕は放射状を基本とする。ただし、左側約1/3は扁広の粗い削りが残り、形状や切り合いから整形段階の粗削りと見られ、右側を中心とする残り2/3近くは調整の削りまでが終了してい

たと想定される。次に、側面は全体に自然面が多く残り、削り痕は上下と左側に主に広がる。また、中央ライン上は溝状に大きく窪み、その右に僅かに削り痕が見られる。裏面は中央部に縦3.0cm、横3.5cm、深さ2cmの隅丸方形に孔を開けている。孔の底は槽状に窪み、さらに、その四隅が工具痕の形状が僅かに窪む。孔以外の面は全て自然面である。原材料は河川や河川堆積物で採集された厚手の扁平な円盤である。加工は一方の原表面を粗削りして平坦化し、次に、平坦面の中央部を残して周囲を粗削りして傾斜をつけ、亀甲の上部を作り出す。それから、粗削り面上を反時計回りに浅く丁寧に桶状の削りを入れて整えて行く。その後、上下と側面に加工を施す。孔を開けるタイミングは、表が中央平坦面の形成から粗削りによる整形前で、裏面も同時並行かと考えられる。断面を観察すると表裏両孔は位置的に一致し、裏面の孔は厚みの中程に達する事から貫通



第14図 第3号溝出土遺物実測図(1/4、1/3、1/2)

が目的と思われる。形状は車輪石や石罫に近く、表裏両面の中央孔は貫通させた後に中央部から周囲を削り取って孔を広げていく方法が想定される。6は滑石製品の素材か未成品であろう。全長8.9cm、幅5.2cm、厚さ2.1cmを測る。資料は正面左側より横方向に割り取られたもので、片側を厚くする意図を感じる。加工は製品の形状を意識し、表面全体と裏面上部を斜方向から粗く平らに削り、裏面左側縁も粗い剝離を加える。その後、表面左上と右下の2か所に鋭利な切れ込みを入れるが、両側縁を段造りにくびれさせた形状を想起する。

以上、3号溝は出土した土器が少なく、時期の比定に困難が伴う。1短頸直は扁球形胴部、直立気味の短口縁に小ぶりの平底もしくは若干尖底。3高環は内湾口縁を呈す。弥生後期後半。4鉢は直湾口縁、薄手で深い作り、内外面ハケ目を施す。古墳時代前期後半～中期前半。土器から得られる古墳時代前期後半～中期前半という時期は滑石製裝飾品の製作時期と重なるもので矛盾しない。

槽(第8・16図)

第1・2号独立柱建物の北に位置して西に伸びる柱穴を確認した。独立柱建物等の施設を圍繞する柵列を想定している。

1次調査では第1号独立柱建物の東に位置して南北に伸び、調査区の北端で西に折れる角を確認しているが、その続きと考えられる。方位はN-66°-Wを示すが、柵列を構成する柱穴の一部が未確認である。要因として後世の削平が疑われるが判然としない。遺構保存の観点から一部を除き遺構の平面のみ検出し、下方は未掘としている。柱穴の平面形は、概ね円形ないしは楕円形であったが、削平のため判然としない。柱間は約2m、径は残りがよいもので約60cmと、1次調査時に確認したものと同程度である。柱穴の一部は明らかに包含層3層の下から掘り込まれているが、4・5層といった包含層との関係は不明である。また、第6号溝や大型の独立柱建物群と平行しているが、対応関係は不明である。

第6号溝[SD-0306](第15図)

発掘区の北側を東西に伸びる。方位はN-119°-Eで概ね条理方向に沿い、大型の独立柱建物等の施設を圍繞する区画溝になると考えられる。

調査は溝の落ち際にあたる上場ラインを部分的に確認するとともに、一部を抜き取って幅員や深さ、断面観察による埋土の層位的状況などを確認した。土層図(第17図)によれば、6号溝北側の上端は標高7.22mの15層上部から掘り込まれ、標高6.95m付近で小さなテラスを設ける。南側の上端は標高7.43mの20層上部より掘り込まれ、標高7.02mの14層下部でテラス状の段を設け底部に至る。その構造は二段掘りの溝となり、規模は上端幅2.25m、底部幅80cm、深さ1.05mを測る。南北上端の位置は30cmの比高差があるが、両側のテラスの位置は同程度と高さを一致させている。溝の上端部南北の比高差は自然傾斜に起因しており、丘陵部の緩やかな落ち際に境に占有地を区画するため、溝が掘



第15図 第1号・第6号溝、土壁実測図(1/100)

り込まれたと考える。

土層観察では22層の層位が確認された。層位を検討すると1～6層は25cmの厚さがあり、黄褐色10YR5/6と明黄褐色10YR6/6の色調のものが主体となる。その中で3～6層が瓦片を含むが、基底にあたる6層は大ぶりな瓦片を多く含むという特徴があり、7層以下には瓦は含まれていない。この黄色系の層とは、1次調査時の包含層3層に相当し整地層の可能性が高い。整地層は概ね平坦に整えられるが、断面の土層は包含層3層が幅1.8m、深さ25cm程度の溝状堆積を示す。平面的には北西から南東側にかけて溝状に長く窪んでおり、その上に2層が堆積する状況である。この点は7層以下基底の13層までが一様に湾曲しており、その状況を上層が反映しているものと解釈する。土層について整理すると、1～6層が包含層3層、8～14層が6号溝の埋土で1次調査時の23層以下に、20層は包含層4層、22層は包含層5層にそれぞれ相当する。

次に、7層は6号溝最上位の埋土8層と包含層3層(1～6層)に挟まれ、溝の北側に当る平坦面に伸びる。調査区北壁土層図(第21図)を観察すると9層に相当し、土塁状遺構横側の1号溝に到達す

る。その内容は褐色7.5YR6/6、明褐色10YR6/6、ぶい褐色7.5YR5/4の各土色が輪状またはブロック状に混合する層で瓦を含まない。この層は様相から見て6号溝上部から北側の緩斜面を平坦化するために充填された人為層と見る。本来、6号溝内側の区画内占有地は平坦面を基本とするが、その北東部は区画外で自然傾斜地と推定される。しかし、占有地の拡大や方位の変更によって区画がずれ、その傾斜地を占有地内に取込む必要から、盛土により傾斜面の平坦化を図ったと想定する。同層は6号溝の埋没後から包含層3層以前に位置付けられる人為層で、瓦を含まないという特徴を示す。

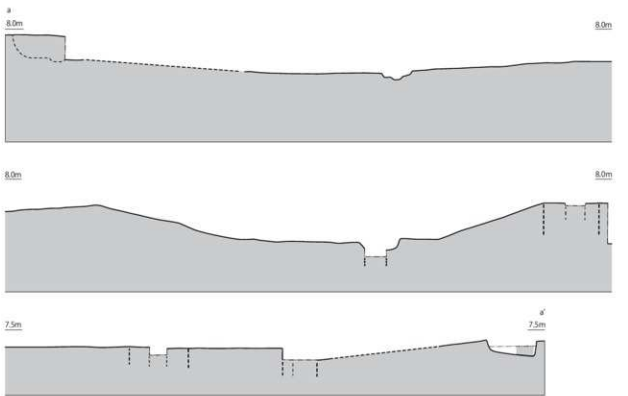
なお、6号溝は7層より古く20層から掘り込まれているため、その構築時期が絞り込めよう。20層は包含層4層に22層が包含層5層に相当する。

第6号溝出土遺物(第18図)

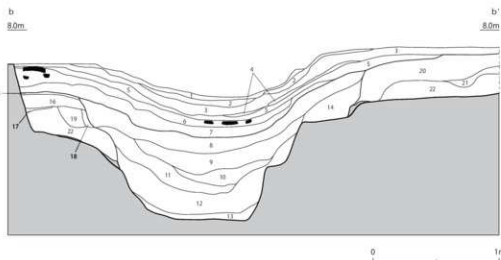
包含層3層出土とした遺物群は、1～6層より得られたもので一括して取り扱い、7層以下は現況の層位で提示する。

1～3は包含層3層出土。1は須恵器環蓋で器壁厚0.4cmを測る。色調は淡灰色～明灰色、胎土と焼成ともに良好。形

状は嘴状口縁が退化し、鋭利さを失った先端は低い。内面は低く稜をなす。調整は口縁部外面を横ナデ、その上方に不正方向のナデを加え、内面を回転ナデにより仕上げる。2は須恵器高台付付身で底径7.4cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は濃い青灰色、胎土に白色粒子を含み、焼成は良好。形状は底部が小さく、形骸化した小ぶりの高台は端部に移り、体部が外反する。調整は底部を回転ヘラ削りした後、丁寧なナデを施す。外面は横ナデ、内面を横ナデにより仕上げる。3は須恵器の小型内面碗で脚状タイプ、脚部径14.6cm、器高3.8cm、上端部突帯間の径10.2cm、陸部径6.4cm、海部幅0.6cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は青灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。全体に作りがシャープである。形状は陸部、海部、外堤からなり、海部と陸部との段差が0.1cm以下と僅かであり、その境界にはバリ状の粘土帯が部分的に見られる。外堤部は幅0.4cm、高さ0.5cmで若干内傾し、その外側0.7cmの位置にシャープな三角形の突帯を配し、外堤との間は凹線状を呈す。脚部がやや外側に踏ん張り、脚端部は三角形に突出する。透かしは長方形で6か所に配されており、碗面は擦れているが雲の痕跡は見当たらない。調整は



第18図 横断面図(1/40)



50-6土層断面図

- 1層 明黄褐色土(10YR6/6)炭化物を少量含む
- 2層 灰褐色土(5YR6/2)に明黄褐色土(10YR6/6)が少量混ざる
- 3層 赤褐色土(5YR4/6)と明黄褐色土(10YR6/6)の混合土少量の細かい瓦片を含む
- 4層 灰褐色土(5YR6/2)に明黄褐色土(10YR6/6)が混ざる少量の細かい瓦片を含む
- 5層 明黄褐色土(10YR6/6)灰褐色土(5YR6/2)の混合土少量の細かい瓦片、流石器、土師器を含む
- 6層 黄褐色土(10YR5/6)に灰褐色土(5YR6/2)が混ざる多量の瓦片と少量の流石器、土師器を含む
- 7層 褐色土(7.5YR6/0)、明褐色土(10YR6/0)、にぶい褐色土(7.5YR5/4)の混合土少量の土師器片を含むが瓦は含まず
- 8層 黒褐色軟質土(7.5YR3/2)1-2cmの円環を少量含む
- 9層 黒褐色軟質土(7.5YR3/2)3cm前後の円環及び、炭化物を多く含む
- 10層 褐色軟質土(7.5YR4/3)炭化物を多く含む

- 11層 褐色軟質土(7.5YR6/7)、褐色土(7.5YR6/8)、礫(1cm前後)の混合土1.0cm前後の角礫及び、円環を含む
- 12層 黒褐色軟質土(7.5YR3/2)1-2cmの角礫及び炭化物を含む
- 13層 灰褐色土(5Y5/0)
- 14層 暗褐色軟質土(7.5YR3/3)1-3cmの角礫及び、円環を含む
- 15層 暗褐色土(7.5YR3/3)
- 16層 灰褐色土(7.5YR5/2)土師器、流石器の破片を含む
- 17層 灰褐色土(7.5YR5/2)3cm前後の角礫及び、円環を含む
- 18層 灰褐色軟質土(7.5YR6/7)と褐色土(7.5YR6/8)の混合土
- 19層 暗褐色土(7.5YR3/3)
- 20層 暗褐色土(7.5YR5/4)1-3cm前後の角礫及び、円環を含む
- 21層 暗褐色土(7.5YR5/4)で20層の層移層
- 22層 黒褐色土(10YR3/2)

第17図 第6号溝土層断面図(1/30)

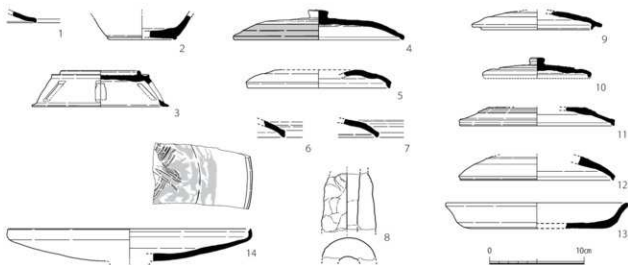
内外ともに横ナデを基本とする。当資料は、破片が層位の上部と下部に分散する形で輸出されている。

4~8は7層出土。4は須恵器環蓋で口径18.2cm、器高3.2cm、器壁厚0.5cm、握みの径2.1cm、高さ1.3cmを測る。色調は白色、胎土に微砂粒を含み、焼成は甘く軟質である。形状は天井部が平坦で、口唇部はシャープさを失い全体に丸く玉縁状を呈す。内面は浅い凹面状を呈し低いが緩となる。貼付けの握みは粗略化が進み、ボタン状で中央が僅かに窪む。調整は天井部が回転ヘラ削り、内外面ともに横ナデ、握みは貼付けて横ナデを加える。5は須恵器環蓋で焼けひずみがあり、天井部を欠く。口径15.4cm、器壁厚0.6cmを測る。色調はにごった灰色、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。形状は天井部が落ち込むタイプで、口唇部は嚙状を呈し、その上部が稜線状に突出する。内面は強く屈曲し、上部に枕線状のラインが生じる。調整は天井部を回転ヘラ削りし、内外面ともに横ナデにより仕上げる。6は須恵器環蓋で、器壁厚

0.5cmを測る。色調は暗灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好である。形状は口唇部の屈曲が弱くやや丸みのある嚙状呈し、前面は直線のである。内面は緩やかに外湾する。調整は横ナデを施す。7は須恵器環蓋で器壁厚0.6cmを測る。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は口唇部のシャープさを失い全体に丸い作りで、内面が浅い凹面状を呈し、資料4に近似する。調整は外面上部に回転ヘラ削りの後にナデを加え、口縁部から内面を横ナデにより仕上げる。8は輪の羽口で残存高6.0cm、断面の推定径2.9cm、内径1.1cmを測るが、径は正円もしくは楕円の可能性があり、寸法は正円と仮定した場合である。器壁厚は1~2cmと厚く、胎土に砂粒が多く含まれ、焼成は良好。上部に2次焼成の変色部がある。形状は台形の筒状を呈し、調整は内外ともに指オサエを基本とし、内面にナデを施す。

9~13は8層出土。9は須恵器環蓋で口径11.6cm、蓋径13.8cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は灰白色、胎土に粗い砂

粒を多く含み、焼成は良好。形状は緩やかに丸味をもつ体部と端部は丸く納める。かえりはしっかりした三角形で、端部から1.1cm内側につき端部と一体化せず内傾気味となる。調整は天井部に回転ヘラ削りを施し、口縁部から内面全体を横ナデにより仕上げる。10は須恵器環蓋で口唇部先端を欠くため推定口径11cm、推定器高2.2cm、器壁厚0.4~0.6cmを測る。握みはボタン状を呈し径1.6cm、高さ0.8cmを測る。色調は淡灰色、胎土に粗い白色粒を多く含み、焼成は良好。形状は体部が直線的なラインを呈し、口縁部は折り返して嚙状となり、前面は丸味のあるカーブを描く。調整は口縁部手前までを回転ヘラ削りの後に横ナデし、口縁部から内面全体を横ナデにより仕上げる。11は須恵器環蓋で口径16.3cm、器壁厚0.3~0.7cmを測る。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は天井部が平坦で口唇部にかけて直線的に傾斜し、口縁部は折り返して嚙状となる。口唇部の前面上部は稜線となり、先端は鋭利な三角形形状を呈し、



第18図 第6号溝出土遺物実測図(1/4)

内面は切り込み状のラインとなる。調整は天井部が回転ヘラ削りの後に横ナデし、口縁部から内面全体を横ナデにより仕上げ。12は須恵器環帯で口径16.2cmを測り、器壁厚は0.5～0.9cmと厚手である。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は全体に丸味を帯び、口縁部は緩やかな曲線を描く。口唇部は強いナデのため急角をなし、下部が稜線状に突出する。内面は浅い凹面となり、弱い稜線がめぐる。調整は天井部を回転ヘラ削りし、口縁部から内面全体を横ナデにより仕上げ。13は須恵器皿で口径19.4cm、器高2.7cm、底径15.6cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は淡灰色、胎土に微量の白色粒を含み、焼成は良好。形状は全体に丸味を帯び、口縁部が外湾しつつ口唇部を丸く納める。調整は内外面に横ナデを加え、底部を回転ヘラ削りの後に、丁寧なナデにより仕上げ。

14は9層出土。須恵器高環を転用した転用器で、復元した坯部は口径25.5cm、器壁厚0.3～0.6cmを測る。色調は外面が淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は口縁部が強く屈曲し若干内傾する。その内面は傾斜し、先端は鋭利な三角形に仕上がる。坯部の底は緩やかな傾斜を呈す。調整は底部外面を回転ヘラ削りした後ナデを加え、口縁部には横ナデを施す。内面については中央付近にヘラミガキを施す。転用器としての使用は、坯部の大きさから推定して本体が割れた後になされた可能性がある。坯部内面は、口唇部から3.3cm程

内側に入ったあたりから中心部にかけて黒の痕跡が広がり、表面が使用のため磨かれて滑らかとなっている。また、付着する墨の濃淡からすると、坯部の中心付近は窪んだ状態で最も濃く、周囲は薄い状態で、左右の両端にはほとんど付着していない。したがって、現況の形状をもって縦に転用したと考える。

土塁状遺構(第19図)

調査区東側で北方向に長さ約4mの盛土を確認した。第6号溝を横切りその上部に正方位の方向で構築されており、盛土の規模は水田による削平のため東端及び上部が確認できない。基底部幅は確認されるだけで1.2～1.5m、上面の幅50～60cm、盛土の高さは現況で50～75cmを測る。構造は、赤色系と黄色系の混合土を互層状に積み重ねたもので、南側部分を先行して構築し、その後、北側部分に黒色系の土を層状に積みあげ、南北を横位に結合させて土塁状とした。先行する赤色部と後行する黒色部は接ぎ木状につながる。土塁土層図(第19図)を観察すると、左側は赤色系の盛土で北側に傾斜する。右側の黒色系盛土は4層から構成され1・4層が黒褐色土、2・3層は黒褐色土と黄褐色や橙褐色土との混合層である。注意点は後者が黒色系盛土と隣接する赤色系盛土の混合という点である。1～4層は一見同色系だが、異質

の土層を交互に積み重ねた互層で、色調を除けば一般的盛土である。おそらく、赤色系と黒色系は質的な違いがあり互いの特徴を活かすため、短いスパンで接ぎ木状に組み合わせる盛土の強化法と考える。ちなみに、壁体の断面は短く、その継ぎ目が残っているとも考えられる。

遺構規模の復元は、道路状遺構が参考となる。同遺構は土塁の盛土に平行し、西側側溝も盛土東端のラインにかなり正確に沿う。確認のため西側側溝北端部の土塁と側溝の間にサブトレンチを設定したが瓦を含む水田下包合層3層は存在しなかった。しかし、道路状遺構北東側のサブトレンチ内では、路面下においてそれが確認され、土塁盛土の東端部と西側側溝との間は、盛土部であったと判明、道路状遺構は土塁盛土の東側に接しつつ、沿うように構築されたと考えられる。したがって、水田によって削平された土塁盛土の東端部を西側側溝の西端ラインとすることが可能である。復元すると基底部の幅は約2～2.2mとなろう。また、後述するが西側側溝の位置が土塁状遺構の東側側溝にあたる可能性が高く、土塁の盛土と東西両側の側溝をもって築地と雨落溝になると考える。

第1号溝 [SD-0301] (第19図)

調査区の東側に位置する。その規模は北側の上部幅88cm、底部幅50cm、深さ40cm、南側の上部幅70cm、底部幅50cm、深さ33cmを測るが、今回確認した範囲内にコンクリート構造物や

瓦葺まりが存在したため、数値的には正確さを欠く。当遺構は土塁状遺構の西側に接して並走しともに正方位を示す。その位置や規模、土塁の西壁下方を垂直に近い形で切り込む状況など両者は併存しており、土塁西側の側溝と考えられる。また、溝の底部は調査区北壁面から約1mまでの範囲内に円礫が敷かれた状態で、素掘りではあるが部分的に礫敷きの可能性がある。調査区北壁土層図(第21図)を観察すると、全体が11層から構成され1層が造土、2層が包含層2層、3～5層が瓦葺りの層、7、8層が包含層3層、9層が6号溝の7層に相当する。10層は灰褐色で円礫や黄褐色礫を含んで6号溝の15～17層に相当しよう。6号溝の北側上端部がこの層を切り込んで掘り込まれている。6号溝の15～17層は一応区別するが包含層4層の可能性もある。11層は6号溝の22層で包含層5層に対比できよう。

層位と遺構の切り合い関係を観察すると、瓦葺りの3～5層が2層下から入り9層と6層の上にも堆積している。このため、1号溝の掘り込み面が判然としなが9層を切っている。9層は6号溝の瓦を含まない7層に相当し、人為層として緩衝面に敷かれたもので、正方位への土地地区画の変更に伴うと考える。したがって、1号溝と土塁状遺構の構築は9層と同時期と考える。

第1号溝出土遺物(第20図)

1は須恵器杯蓋で口径17.4cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は灰色で胎土、焼成ともに良好。形状は口縁部が屈曲し折返し状になるが口唇部が丸味を帯び、内面の屈曲部に凹面が生じる。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げられる。2は須恵器杯蓋で口径13.4cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は灰白色、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好。口縁部は緩やかな曲線から先端へと丸味をもってカーブする。口唇部は嚙状風となり内外ラインは直線的で屈曲しない。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げる。3は須恵器杯蓋で器壁厚0.5cmを測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。口縁部は直線的に先端へ続き、口唇部は嚙状風となり内外ラインは直線的で屈曲しないが、前面がナデにより若干の凹面を呈す。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げる。

道路状遺構(第22図)

調査区東側の端において、東西両側溝と路面部分を南北約3m検出した。幅員は発掘区北側壁面付近で最大5.92m、東側と西側の側溝の心々間で5.16m、内法4.42m、南側では最大5.2m、東側と西側の側溝の心々間で4.62m、内法4.04mを測る。西側側溝は発掘区北側壁面付近で上端幅58cm、底部幅46cm、深さ7.7cm、東側側溝は上端幅62cm、底部幅42cm、深さ3.9cmを測る。当遺構は土塁状遺構の東側に位置して、盛土部に平行しともに正方位を示す。土塁東端部の現況と西側側溝との間は幅62～80cmで、土塁状遺構の復元で触れたように、本来そこには土塁盛土の東端部があり、そのラインに沿って道が構築されたと考えられる。水田北壁土層図(第22図)によれば、1層の旧水田層がありその下に2・3層の包含層が確認される。これは1次調査時における1・2層に対応するもので黄褐色系の色調を呈す。路面は3層下に位置しており、両側溝内には2・3層の埋土層が確認される。1次調査では2層下に灰褐色の瓦を包含する3層が検出されているが、今回は路面下において検出されており、瓦の包含層上に路盤を設けていることが分かる。また、自然地形は北東側に低くなっており、路面は西南側に高くなるため南側は削平により極めて浅いか失われたようである。

本来、西側側溝は位置や規模といった点から1号溝と同様に土塁状遺構の東側に位置する側溝としての機能が想定されよう。しかし、8世紀末～9世紀初頭をもって側溝としての機能は失われ、やがて、大量の瓦が廃棄され当遺構の東にも瓦を含む包含層が堆積する。おそらく、側溝もその下に埋もれたものと推定できる。その後、形状を保つ土塁の東側に道路を構築するが、その際に側溝を掘り直して道を整えたとも考えられる。

道路状遺構出土遺物(第23図)

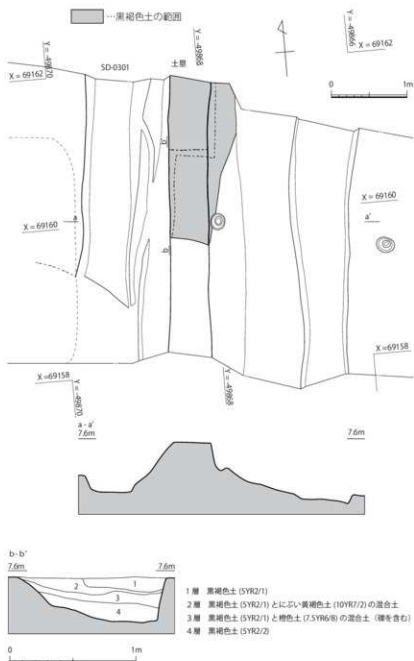
遺構に関連する遺物は少量で、1は東側の側溝内、2～4は路面上、5は包含層2層から出土している。1は土師器小皿の底部で、底部の器壁厚0.6cmを測る。色調は灰黄褐色、胎土、焼成ともに良

好。形状は厚手の底部に外反する口縁部は短い。底部は糸切で体部の調整は横ナデが施される。2は白磁碗の口縁部で、色調は胎土が灰白色、軸は僅かに灰色味を帯びる。胎土、焼成ともに良好であるが、所々に細かい気泡が見られる。器壁厚0.35cmを測る。形状は口縁部が直線的に外反し、小さな玉縁口縁部を呈す。口縁下に1条の浅い沈線が施す。3は白磁碗の口縁部で、色調は胎土が灰白色、軸は僅かに灰色味を帯びる。胎土、焼成ともに良好である。器壁厚0.3cmを測る。形状は口縁部が直線的に外反し小さな玉縁口縁部を呈すが、下部が僅かな凹面を呈すため、下端が緩となる。4は青磁碗の口縁部で、器壁厚0.3cmを測る。色調は胎土がガラス質の白色、軸は透明感のある明灰褐色を呈し、細かな気泡が密に存在する。形状は口唇部を外側に丸めて小さな玉縁口縁部に仕上げ、全体に厚みを施す。ただし、この資料は近代型に属す可能性が高く、水田層下という土状況から混入したとも解釈される。5は瓦質の三足土器で残存高5.1cm、断面径2.4～2.6cmを測る。色調は灰黄色で、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良好。形状は断面が円形の脚部が緩やかに外反し、やがて垂直に下がるものと考えられる。上部は取り付けられた器の胴部から底部にかけての内面となる。調整は指ナデもしくは指オサエにより形状を整えている。

包含層(第21図)

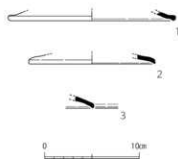
本書で使用している「包含層2層」「包含層3層」「包含層4層」「包含層5層」は、1次調査の層位を踏襲している。遺構内埋土との対応関係は、調査区北壁面2層＝包含層2層、調査区北壁面7・8層＝包含層3層、SD-6の1～6層＝包含層3層、SD-6の20層＝包含層4層、SD-6の22層＝包含層5層である。

包含層の2層、3層、4層を順次検出したが、5層については6号溝の一部検出時に断面を確認したに留まる。2層は調査区の北側において比較的良好な状態を確認し、関連して瓦葺り(第24図)を検出した。瓦葺りは調査区東側の土塁状遺構北西端部に位置し、比較的大きな瓦片が重なるように堆積し土砂の混入は少

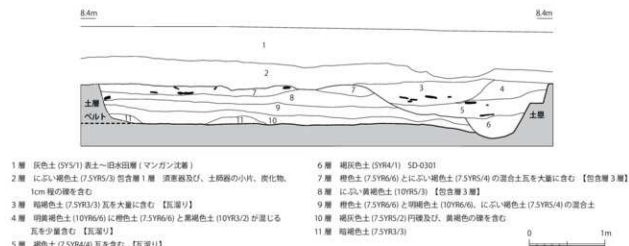


第19図 第1号溝・土壁状遺構平面図(1/50)・土壁状遺構土層断面図(1/30)

ない。その状況は土壁内側にできた窪みを利用して瓦を廃棄した感が強い。調査区北壁土層図(第21図)によれば、3～5層が瓦溜りに相当するもので7～9層の上に堆積しており、それを覆って2層が堆積している。位置的には土壁状遺構の西側に接する状況で、層位的に2層と3層の間に位置する。7・8層は包含層3層に相当するもので、瓦はすでに3層から混入が始まるが、2層が堆積する前段にまとまった瓦の堆積があり、瓦溜りを作るような廃棄行為が想定される。さらに、1次調査時の確認では2層上部でも多くの瓦が堆積する状況にあった。3層については6号溝の記載時に詳しく触れており重複を避けるが、調査区北壁面においてその広がりを観察すると、発掘区の中央より北東側では2層より構成され上層に瓦を多く含む20～30cmほどの厚さの部分を確認できる。4層は堆積後に6号溝が掘り込まれており溝の時期決定に大きく関与する。しかし、実際には調査区内を部分的に掘り下げた狭小な面積であり、西側は構造物のため攪乱が著しく、注意して遺物を取上げたが遺物が混在する可能性は否めない。



第20図 第1号溝出土遺物実測図(1/4)



第21図 調査区北壁面土層断面図(1/50)

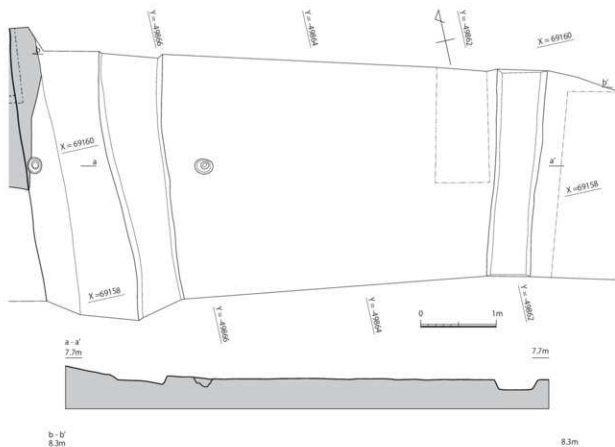
最後に、包含層中より得られた白色土について記載しておこう。1次調査では、廃瓦に混ざり白色土を検出、ある程度の量をもった散布状況から、建物の白壁に使われた漆喰の可能性を考えた。今回、瓦割の下部と包含層3層の下部から得る。前者は大きさが2cm以下、厚みが1cm以下の扁平な塊で含まれていた。後者は大きさが5~6cm、厚みが1.5cmと臃まった状態で出土しており、量としては後者がかなり多い。また、両者は出土した層位が異なるため時差を考慮する必要があるだろう。

包含層2層出土遺物 (第25回)

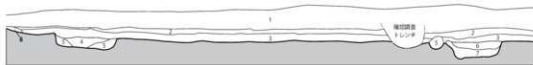
1は須恵器環蓋で天井部の器壁厚0.5cmを測る。握みは扁平な宝珠状を呈し径2.4cm、高さ0.8cmを測る。色調は暗灰色、胎土は砂粒を含み、焼成は良好。形状は天井部も含め全体に平坦化し、調整は天井部を回転ヘラ削りし、その他は横ナデにより仕上げられる。2は須恵器環蓋で器壁厚0.3cmを測る。握みはボタン状を呈し径1.6cm、高さ1.1cmを測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。調整は天井部を回転ヘラ削りし、内面を横ナデにより仕上げられる。3は須恵器環蓋で口径14.4cm、器壁厚0.8cmを測る。色調は灰色、胎土は良好、焼成はやや甘く軟質。形状は全体に丸味を帯びやや厚手の作りで、口縁部は直線的となり口唇部が方形の断面形を呈し角が鋭利な様となる。内面には段がつく。調整は天井部に回転ヘラ切りの後にナデを加え、口縁部と内面全体を横ナデにより仕上げられる。4は須恵器環蓋で口径14.3cm、器壁厚0.8cmを測る。色調は自然釉によりにごった橙色、内面が灰色を呈す。胎土に粗い砂粒を含み多く、焼成は良好。形状は全体に凹凸のある扁平な厚い作りで、天井部や高い。口唇部は角に丸味をもつ嘴状を呈し、内面は緩やかな凹面をなす。調整は内面に横ナデを施すが、表面は厚い自然釉ため観察できない。5は須恵器環蓋で口径13.7cm、器壁厚1.1cmを測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。形状は全体に扁平で天井部と口縁部の境付近で屈曲する。口縁部は屈曲が弱く直線的で、口唇部の前面がナデにより上下に稜がで、内面は屈曲手前で僅かに内湾する。調整は天井部が回転ヘラ削りされ、口縁部から内面全体をナデによって仕上げら

れる。6は須恵器環蓋で口径13.2cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は灰色、胎土は粗く砂粒を多く含み、焼成は良好。形状は全体に丸く、口縁部の屈曲が弱く直線的で口唇部は玉縁状の丸い作りとなり、内面が浅い凹面状を呈す。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げられる。7は須恵器環蓋で口径12.8cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は青灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成はやや甘く断面が赤紫色を呈す。形状は全体に扁平な味で屈曲が多く、口唇部はシャープさを失い玉縁状で僅かに稜がつく。内面は浅い凹面状を呈す。天井部は回転ヘラ削りされ、口縁部から内面全体をナデにより仕上げられる。8は須恵器環蓋を転用した転用碗で、口径は口縁部を欠くため14.2cm以上、残存高2.0cm以上、器壁厚0.4~0.6cmを測る。握みは扁平な宝珠状を呈し径2.0cm、高さ0.4cmを測る。色調は淡青灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は天井部が落ち込むタイプで口唇部の形状は不明。調整は天井部を回転ヘラ削り後は未調整。口縁部から内面を横ナデにより仕上げられる。転用碗としての使用は、内面端部の一部を除き使用のため擦れて滑らかとなっている。墨の痕跡は中心部から周囲へと広がり、特に上部から右側の端が濃くなっており、体部の屈曲によって低くなる位置が墨の溜りて考えられる。9は須恵器高台付坯身を測る9.6cm、高台高0.5cm、高台幅0.5cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は暗緑灰色、胎土、焼成ともに良好。形状は口縁部が外反し、底部付近に稜ができる。高台はシャープで外側に張り出す。調整は底部を回転ヘラ切りの後にナデ削りし、体部下端付近は回転ヘラ削りする。10は須恵器高台付坯身の口縁部で口径15.8cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は口縁部が内湾気味に開き、口唇部をやや鋭利に仕上げられる。調整は内外面ともに横ナデを加える。11は須恵器高台付坯身の底部で口径11.4cm、高台高0.4cm、高台幅0.9cm、底部の器壁厚1.2cmを測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。形状は底部が丸味を帯び、低い幅広の高台をかなり内側に貼り付けられる。調整は底部を回転ヘラ削りし、内外面ともにナデにより仕上げられる。転用碗としての使用は、内面端部の見込

みまで使用のため擦れて滑らかとなっている。墨の痕跡は中心部から周囲へと広がり、特に、線状に付着する墨跡は平行的で、墨の濃淡からすると墨を前後に動かして墨をする様子が浮かぶ。12は須恵器蓋で口径15.4cm、残存高8.9cm、器壁厚1.4cmを測り、色調は淡赤紫色、胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや甘い。形状は胴部が緩やかに外反し厚手の作りである。調整は胴部を回転ヘラ削りし、底部を回転ヘラ切り後に不正方向のナデにより仕上げられる。特記事項として底部内面に赤紫色の付着物が認められる。整形時の凹面に付着し、光沢を放ち僅かな厚みを持つものである。13は須恵器短頸壺で口径13.4cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は灰色、胎土、焼成ともに良好。形状は外反する口縁部を肥厚させて有段とし、下端を鋭利に突出させる。調整は内外面を横ナデによって仕上げられる。特記事項としては口唇部から内面にかけて光沢を放つ暗褐色の付着物があり、ウルシの可能性もある。14は須恵器蓋で口径16.2cm、器壁厚0.8cmを測る。色調は暗灰色、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好。形状は外反する口縁部を肥厚させて有段とし、下端にヘラ書きの紋線を引くことで、段の下部を三角突状に突出させる。調整は内外面を横ナデにより仕上げられる。15は内黒と称される黒色土器で口径6.2cm、底部器壁厚0.5cmを測る。高台高は0.2cm、高台幅0.4cmを測る。色調は外面赤褐色、内面は黒褐色、胎土に砂粒を含み、焼成は甘く軟質。形状は高台が削り出し、上部断面が低い三角形を呈し、縁輪碗の底部形態に近似する。調整は観察できない。16は土師器で口径7.6cm、高台高0.6cm、高台幅0.7cm、器壁厚0.6cmを測る。色調は赤褐色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質。形状は幅広くしっかりした高台が直立し、内側を斜めに調整する。調整は外面を回転ヘラ削りし、内面はナデが一部に残る。底部は回転ヘラ削りで仕上げられる。17は土師器の移動式甕の把手部分と考えられる。器壁厚は0.7cm、高台幅8.7cm、縦3.0cmを測る。形状は体部がハ字状で、把手は緩やかな弓状を呈す。色調は黄灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は甘く軟質。調整は内面とともに磨削が著しいが、表面にタタキ目が僅かに残る。把手は粗い指オサエや横ナデによって貼り付けられてい

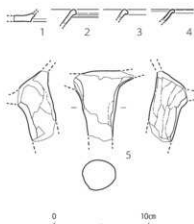


表土～埋戻土



- 1層 灰色土 (5Y6/1) 旧水田層
- 2層 明黄褐色土 (10YR6/6)
- 3層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
- 4層 暗灰色土 (7.5YR5/1) と明褐色土 (7.5YR5/6) の混合土
- 5層 暗灰色土 (7.5YR4/1) と明褐色土 (7.5YR5/6) の混合土
- ※ 4層、5層は水田下道路状遺構西側の側溝内埋土
- 6層 にぶい黄褐色土に暗褐色 (7.5YR3/3) の粒子が多く混じる
- 7層 にぶい褐色土 (7.5YR6/3) に暗褐色土 (7.5YR3/3) 及び、褐色障 (7.5YR6/6)、明黄褐色土 (10YR6/6) が混じる
- ※ 6層、7層は水田下道路状遺構東側の側溝内埋土
- 8層 硬化障層

第22図 道路状遺構実測図(1/50)



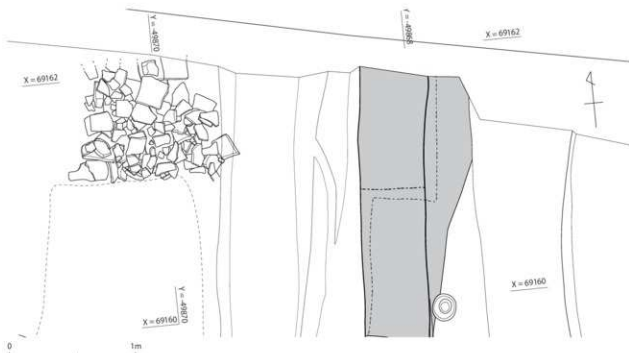
第23図 道路状遺構出土遺物実測図(1/4)

る。18は緑軸陶器碗の体部片と考えられる。器壁厚0.4cmを測る。色調は黄緑色、胎土に黒色粒子が微量含まれ、焼成は良好。軸は内外の両面に施され全体に薄く一定量を保ち、胎土は淡灰色を呈すが、内外ともに軸近くが黄色のマダラ状に発色し、全体に薄い斑紋が現れる。19は陶器の瓶もしくは壺の底部付近で、残存部の最大径6.5cm、残存高5.6cm、器壁厚0.5～0.9cmを測る。色調は外面が黄褐色、内面が須恵質の灰白色、胎土は良好でにぶい黄褐色を呈す。焼成は良好である。形状は長胴気味で底部がしまるため、若干下膨れとなる。外面には幅0.5cmの棒状粘土縷を縦に貼り付け隆帯とし、2本を1単位として、胴部周

圍を9単位18本の隆帯が貼り付いて器面を分割したようで、隆帯以外に裝飾は見られない。軸は外面に施され、全体に薄く均一に広がる。底部は上げ底と思われる。先の緑軸陶器の近くで出土している。

包含層3層出土遺物 (第25図)

先に記した第6号溝出土遺物1～3は、同包含層に含まれる。1は須恵器坏蓋で口径24.6cm、器壁厚0.6cmの大型品である。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は天井部を欠くが、残存高2.1cmと扁平で端部へと直線的に伸び、口縁部を軽く折り



第24図 互瀧まり遺物出土状況実測図(1/30)

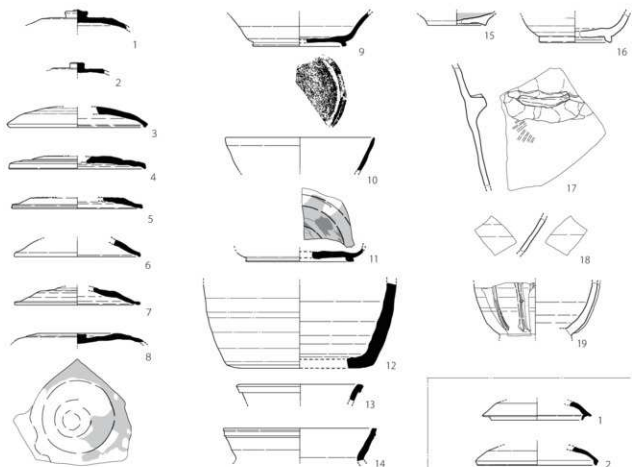
曲げて嘴状とする。口唇部は下部を突出させ内面を凹面にして棧となる。調整は天井部を回転ヘラ削りし、口縁部から内面の全面を横ナデにより仕上げる。2は須恵器高台付坏身で口径14.0cm、器高4.2cm、底径10.6cm、器壁厚0.3cm、高台高0.5cm、高台幅0.8cmを測る。色調は灰白色、胎土に砂粒を少量含む。焼成は甘く軟質。形状は口縁部が緩やかに外反し、高台が端部に付される。体部は直線的で高台との境が高台貼り付け位置と重なるため、稜線が見え隠れする。高台はしっかりしており、内面が切れ込んで棧となる。調整は底部が回転ヘラ削りの後、中央を残し外側をナデ消す。体部の内外面はともに横ナデにより仕上げる。3は須恵器高台付坏身で口径10.8cm、器壁厚0.4cm、高台高0.6cm、高台幅0.6cmを測る。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質。形状は体部が外反し下端が棧となる。高台は内側にあって高く、外方に張り出す。調整は底部に回転ヘラ削りの後にナデを加え、体部の内外面とともに横ナデより仕上げる。4は須恵器高台付坏身で口径6.8cm、器壁厚0.3cm、高台高0.2cm、高台幅0.5cmを測る。色調は淡青灰色、胎土に砂粒を少量含む。焼成は良好。形状は体部が外反し下端が張って棧となる。高台は低く直線的に立ち上がる。調整は底部に回転ヘラ削りの

後に丁寧なナデを加え、体部の内外面ともに横ナデにより仕上げる。5は須恵器高台付坏身で口径7.2cm、器壁厚0.3cm、高台高0.4cm、高台幅0.6cmを測る。色調は淡灰色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は良好。形状は体部が丸味を帯びて緩やかに外反し、下部が棧となる。高台は高さ、幅ともにしっかりし、やや外側に付される。調整は底部に回転ヘラ削りの後にナデが加えられる。体部は内外面ともに横ナデにより仕上げる。6は須恵器高台付坏身で口径9.8cm、器壁厚0.5cm、高台高0.5cm、高台幅0.5cmを測る。色調は灰白色、胎土は良好、焼成はやや甘い。形状は体部が丸味を帯びて緩やかに外反し、下部の棧は不明瞭。高台は高く外に開くが細身で端部近くに付される。調整は底部が回転ヘラ削りの後にナデが加えられる。体部は内外面ともに横ナデにより仕上げる。7は須恵器高台付坏身の底部で、墨書土器である。口径7.8cm、底部の器壁厚0.5cm、高台高0.3cm、高台幅0.8cmを測る。色調は濃青灰色、胎土にやや粗い砂粒を少量含む。焼成は良好。形状は底部内面が平坦で、見込部分が少し窪む。体部は丸味を帯びて下端がやや鋭利な角をもつ。高台はやや外側に付され、低い幅広となる。調整は底部に回転ヘラ削りの後に丁寧なナデが加えられる。体部は内外面ともに横ナデにより仕上げる。墨書は高台内中

央付近の外面に「門」という字が書かれている。8は土師器杯蓋で口径19.4cmを測る。色調は淡黄茶色、胎土に微量の砂粒を含み、焼成は不良で脆い。形状は口縁部が直線的に伸び、口唇部は丸く玉縁状をなす。内面は僅かに凹面をなして不明瞭ながら稜線となる。9は土師器瓶の把手で体部の器壁厚0.7cm、把手の全長5.5cm、断面部の厚さ4.2cmを測る。色調は明褐色、胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良好。調整は胴部にハケ目を施し、把手は指オサエとナデで仕上げる。胴部内面は縦位の指オサエ後に横位の指オサエを加える。一部に赤色顔料が付着する。

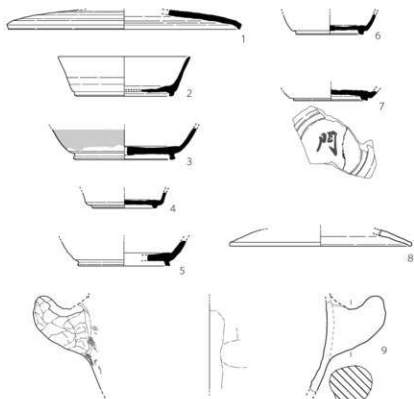
包倉層4層出土遺物 (第25図)

1は須恵器杯蓋で口径11.6cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は暗灰色、胎土に砂粒を少量含む。焼成は良好。形状は全体に丸く内面に凹面にかえりをもつ。かえりは厚みがあり鋭利な切り込みが入り縁をなす。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げる。2は須恵器杯蓋で口径12.4cm、器壁厚0.4cmを測る。色調は淡紫灰色、胎土に微砂粒を含み、焼成は良好。形状は全体に丸く口縁部を折り返して嘴状口縁とし、内面の折れは明確な棧となる。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げる。体部の一部に自

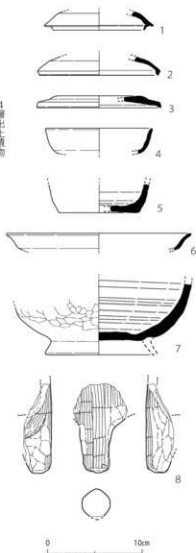


2層出土遺物

3層出土遺物



4層出土遺物



第25図 包含層出土遺物実測図(1/4)

然軸がかかる。3は須恵器环蓋で口径13.2cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は淡黒灰色、胎土に微砂粒を含み、焼成は良好。形状はやや厚手の扁平な体部で、口縁部を折り返して嚙状とするが、縁が丸味を帯びシャープさに欠ける。内面は凹面状になしやや不鮮明な線紋となる。調整は天井部を回転ヘラ削りし、口縁部から内面全体を横ナデにより仕上げ上げる。4は須恵器高杯の受部もしくは埴と思われ。口径10.4cm、器壁厚0.4cmを測る。形状は口縁部が緩やかに外反し、口唇部を丸く納める。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げ上げる。5は瓶の底部で底径8.2cm、器壁厚0.5cmを測る。色調は青灰色、胎土に粗い粒子を少し含み、焼成は良好。形状は底部から胴部へと緩やかに外反し、底部との境は丸味を帯びる。調整は内外面ともに横ナデを使用するが、内面は強く行うため凹凸が生じる。底部をヘラ切りの後にナデにより仕上げ上げる。6は須恵器皿で口径19.6cm、器壁厚0.3cmを測る。色調は淡灰色、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。形状は口縁部がやや強く外反し、底部付近は屈曲して稜となる。調整は内外面ともに横ナデにより仕上げ上げる。7は赤焼土器の短頸壺と考えられる。推定底径11.8cm、残存高7.5cm、残存部胴部最大径19.6cm、器壁厚0.8～1.2cm、高台高2.0cm、高台幅0.7cmを測る。色調は外面がふいふ赤褐色、内面は橙色を呈す。胎土は精緻で粗い砂粒を少量含み、焼成はやや甘く軟質。形状は厚手の胴部下下が下膨れであり、全体にやや扁球形形状を呈すと考えられる。高台は高く外方に強く張り出し、頑丈な作りで鋭利に仕上げられている。調整は外周下方を静止ヘラ削りの後にナデを加え、上方は丁寧に横ナデを行なって全体を整える。内面は回転ナデを加え、整形時の凹凸を平坦化しており、底面は高台を貼り付けるため指オサエを施す。胴部径や張り具合から短頸壺を推定したが、本来、骨藏器としての有蓋短頸壺を模倣したもの、あるいは、表面の光沢をもつような丁寧な仕上げから、銅製骨藏器も模倣の対象となる。8は四足土器の脚部と推定される。色調は橙色、黒斑が平近くを占める。胎土に粗い砂粒を含み、焼成は良好。形状は垂直に立ち上がる足部は上部に向かって幅広となる。調整を交えて記

述すれば、中央が正面で上部から下部に粗いハケ目を使用し、両側面は削りとナデにより仕上げ上げる。特に、左の側面図は上部に時計回りに凹弧を描くようにハケ目を施し、その部分が頸部のように突出する。中央の右ラインは緩やかなカーブを描き、左ラインは急上昇する。したがって、上方から見た場合の平面形は長方形形状を呈すと推定する。また、ハケ目という点から弥生時代以降と考えるが、時期やどのような製品なのか特定はできない。

瓦

包含層3層（5D-6の1～6層）から出土し始め、面戸瓦の完形品も含まれる。瓦葺りは包含層3層と包含層2層の間に位置する。1次調査時に包含層2層上部で瓦葺り状のものが検出されている。廢棄瓦は包含層3層→瓦葺り→2層上部の順で段階的な建物群の廢絶過程を想起させる。

瓦の出土重量は、平瓦299.7kg・丸瓦67.5kgを計る。本遺跡出土例をもとに推定した完形品1個体の重量は、平瓦約3.6kg・丸瓦約1.8kgであり、出土重量から個体数を換算すると、平瓦83.25個体・丸瓦37.5個体に相当する。平瓦と丸瓦の数量比は2.22:1となり、総瓦葺建物が存在したと考えられる数値である。その他の瓦は、軒平瓦13個体・軒丸瓦5個体・擬斗瓦12個体・面戸瓦12個体である。

全てを取り上げて報告することができないため、ここでは遺存状態の良い資料や特徴的な資料の中から抽出したものを報告する。なお、報告には「大宰府史跡出土軒瓦・甲打痕文字瓦型式一覧」（九州歴史資料館2000）を援用している。

軒丸瓦（第26図）

破片資料のものも相当数あると思われるが、瓦当状況の分かるものを5点抽出している。

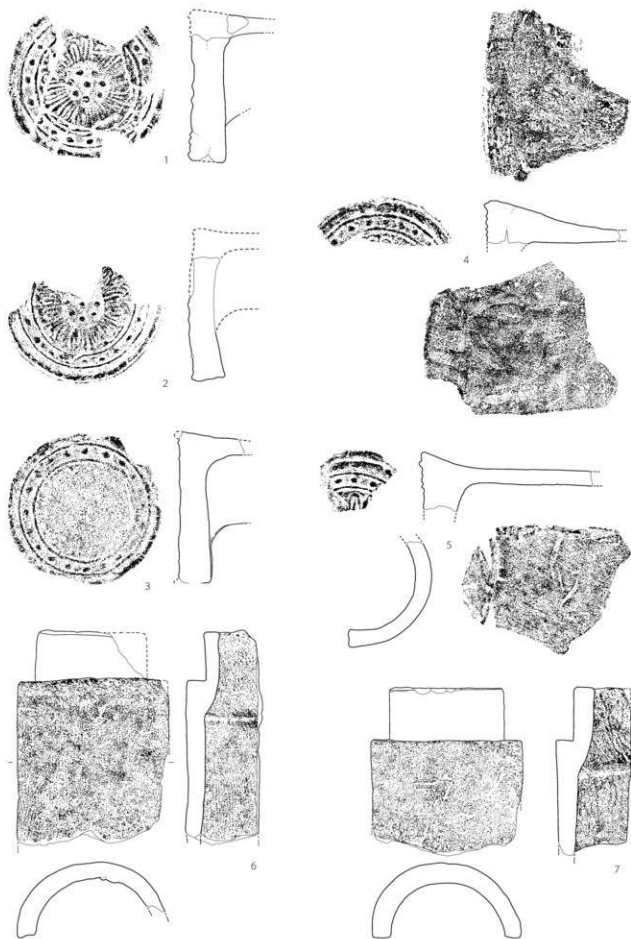
状態により配文が不明瞭なものは3のように中房から内区にかけて一切削りつかなないものもあるが、型式は全て241型式の湯輪筋系軒丸瓦の範疇で考えているものである。

1は包含層3層出土。復元される外区径14.6cm、内区径9.6cm、中房径5.2cm、厚さは3.0cm～3.9cmを測り、色調は淡黄褐色。瓦当表面はやや磨滅気味であるが、断面に接合痕跡をよく残している。なお、接合痕からの復元では、瓦型范に向けて中房部分から粘土を充填し始め、弁区から周縁部へ順次に瓦を詰め、瓦当厚の半分くらいまで充填を完了した段階で丸瓦を接合しつづ、厚みを増している。

2は水田下包含層出土。瓦当下半部分の残存。復元される外区径13.5cm、内区径10.8cm、中房径6.0cm、厚さは2.7cm～3.5cmを測り、色調は淡灰色・灰褐色。全体的に表面は磨滅気味であるが、丸瓦の接合部位から欠損しているため、瓦1と同様な接合痕跡がよく把握できる。3は包含層2層出土。遺存状態が他の瓦に比べて格段に悪く、珠文及び内区の配置については確認できない。復元される外区径13.9cm、内区径10.9cm、中房径5.2cm、厚さは2.8cm～3.4cmを測り、色調は淡黄褐色・淡灰褐色。4は包含層2・3層出土。瓦当の大半を失っているため、中房内及び蓮華文の構成を詳らかにできず、外区珠文7個のみが確認できる。復元される外区径17.4cmを測り、色調は淡灰色・暗灰黄褐色。5は包含層2層出土。瓦当部分の残りは僅かであるが、丸瓦部分が他に比べ比較的残存している。瓦当の大半を失っているため、複弁蓮華文の2個、外区珠文3個のみが確認できる程度である。厚さは3.7cm程度を測り、色調は淡灰褐色・暗灰褐色。丸瓦部分の上面は縦方向へのヘラ削り痕跡が顕著で、内面は糸切り後ナデ調整、一部は布目痕も残る。この瓦については、瓦当から丸瓦に至る傾斜が急角度であり、鳥倉に用いられた可能性も指摘しておく。

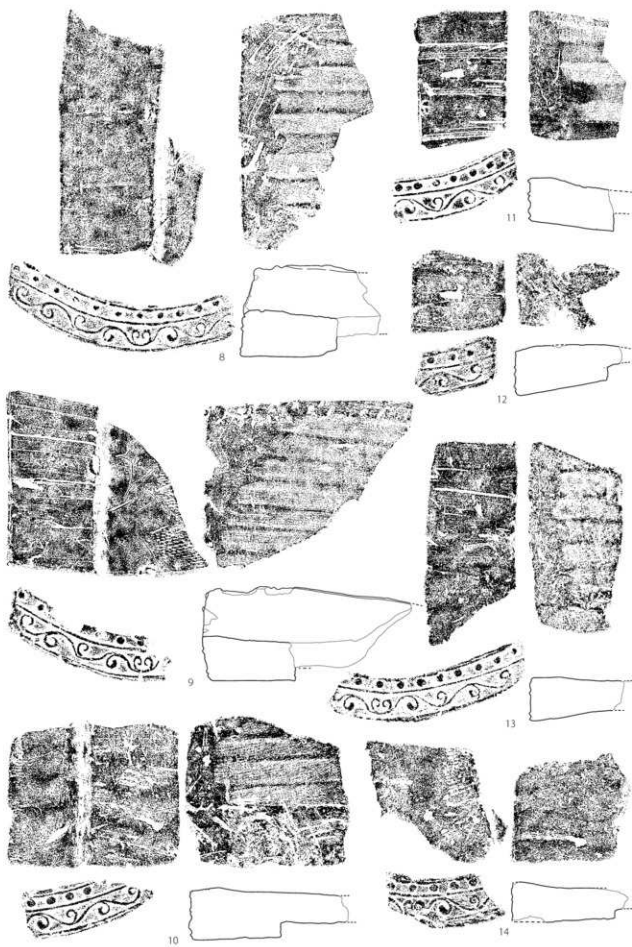
丸瓦（第26図）

6は包含層2・3層出土。玉緑式丸瓦で、残存長22.7cm、幅16.0cm、厚さは1.4～2.1cmを測り、色調は淡灰黄色・淡黄褐色。凸面に観目痕7本単行 α 後ナデ。凹面は布目圧痕後糸切り調整で玉緑と丸瓦の接合する段の部分にのみ布目痕、凹面に横帯痕も確認できる。縦周縁は、凹面側から切欠部分割痕を残す。また、接合痕では縦方向の粘土板2枚を接合した際の粘土塊を顕著に留める。7



第26図 軒丸瓦・丸瓦実測図(1/4)

0 10cm



第27回 軒平瓦実測図(1/4)

は包含層2・3層出土。玉縁式丸瓦で、残存長17.8cm、幅16.0cm、厚さは2.1～2.4cmを測り、色調は暗茶褐色。凸面にはぼなで調整できるが平滑に仕上げているため、縄目痕跡を留めていない。凹面は布目圧痕後糸切り調整で玉縁と丸瓦の接合する段の部分に指頭圧痕を残す。一部に模骨痕も確認できるが不明瞭。縦瓦縁には、凹面側からの切断分割痕を残す。また、玉縁凹面に布目2本の髪が確認できる。

軒平瓦 (第27図)

破片資料のものも相当数あると思われるが、瓦当状況の分かるものを7点抽出している。瓦当全ての所見でも、均整唐草文を配し、唐草周囲に一切加飾が加えられておらず、型式は全て642A型式の湖鏡銘式軒平瓦のみが出土している。

8は包含層2層出土。復元される上下弦幅は28.0cm、厚さは4.4cmを測り、色調は淡灰褐色。凸面側は段頸に仕上げ、ヘラ削り後ナデを施す。凹面瓦当上は荒いヘラ削りを施すが、顕著な模骨痕跡を留め、幅は2.2cm～3.0cmを測る。布目圧痕は3cm単位で経糸21本、緯糸28本と細かな織素材である。9は包含層2層出土。復元される上弦幅は27.8cm、下弦幅29.2cm、厚さは4.7cmを測り、色調は淡灰色。凸面側は段頸に仕上げ、頸部分に荒いヘラ削りを施す。平瓦部分に布目圧痕を留め、縄目10本単位である。凹面瓦当上は荒いヘラ削りを施すが、顕著な模骨痕跡を留め、幅は2.2cm～2.8cmを測る。布目圧痕は3cm単位で経糸21本、緯糸28本である。10は包含層2層出土。厚さは5.2cmを測り、色調は淡灰色。凸面側は段頸に仕上げ、頸部分に3cm程度の荒いヘラ削りを施す。凹面瓦当上は荒いヘラ削りを施すが、模骨痕跡を留め、幅は2.2cm～2.8cmを測る。布目圧痕は残るがやや不明瞭である。また、縦方向の粘土板を2枚接合した際の接合痕跡も留めている。11は包含層2層出土。厚さは4.5cmを測り、色調は淡灰褐色。凸面側は段頸に仕上げ、縦位の荒いヘラ削りを施す。凹面瓦当上は荒いヘラ削りと周縁平坦調整を施す。模骨痕跡を留め、幅は1.9cm～2.3cmを測る。布目圧痕は3cm単位で経糸22本、緯糸26本である。12は包含層2層出土。厚さは残存部で5.0cmを測

り、色調は淡灰茶褐色。凸面側は段頸に仕上げ、頸部分にナデを施すが、8本単位の縄目痕跡も一部に留める。凹面は模骨痕跡、布目圧痕とも残るが器面磨滅のため不明瞭である。布目組織状の圧痕も7.4cm程確認できる。13は包含層2層出土。復元される上弦幅は28.4cm、下弦幅30.0cm、厚さは4.5cmを測り、色調は淡灰茶色。凸面側は段頸に仕上げ、頸部分に面取り様の荒い縦位ヘラ削りを施す。凹面瓦当上は荒いヘラ削りと周縁平坦調整を施す。模骨痕跡を留め、幅は2.5cm～3.0cmを測る。布目圧痕も確認できるが、器面磨滅のため、不明瞭である。

14は包含層2層出土。厚さは4.5cmを測り、色調は淡灰茶色。凸面側は段頸に仕上げ、頸部分に面取り様の荒い縦位ヘラ削りを施す。凹面は模骨痕跡、布目圧痕も確認できるが、器面磨滅のため不明瞭である。

契斗瓦 (第28図)

破片資料のものも相当数あると思われるが、契斗瓦と判断できるものは限られており、4点を抽出している。なお、一昨年度実施した第1次調査からも出土しているが、厚みが2.0cmを超えるやや厚いものと薄いものがある。これは、例えば雁振瓦(椀瓦)と契斗瓦の差異を示しているのか、降棟等の用いる部分によって厚みを相違させているのか定かではないが、今後注意を必要とすべきものである。15は包含層2・3層出土。残存長18.0cm、幅14.7cm、厚さは2.3cmを測り、色調は淡灰黄色。凸面に斜位縄目9本単位後荒い糸切り。凹面は布目圧痕後糸切り調整で一部ナデがあり、一枚作りである。縦瓦縁には、凹面側からの切断分割痕を残す。16は包含層2・3層出土。残存長14.40cm、幅13.6cm、厚さは1.6～1.8cmを測り、色調は淡灰茶色。器面全体が磨滅気味であるが、凸面に斜位縄目7本単位、然り玉2本が見える。凹面は布目圧痕後糸切り調整である。縦瓦縁には、凹面側からの切断分割痕を残す。17は包含層2・3層出土。残存長18.9cm、幅13.7cm、厚さは3.3～3.5cmを測り、色調は淡灰黒色。凸面に縦位縄目7本単位、凹面は布目圧痕及び粗粒圧痕2本が残るが、器面全体の磨滅ため不明瞭。縦瓦縁には、凹面側からの切断分割痕を残す。18は表採資料。残存長16.3cm、

幅13.8cm、厚さは3.0cmを測り、色調は淡灰黄色。凸面に縦位縄目8本単位が入る。凹面の布目圧痕は解れた状態の一部に観察でき、緯糸6.5cm単位でやや太めの糸痕跡が見え、その間の緯糸は48本程度である。経糸は緯糸と同様に4.5cm単位で太さを訪いでいるようであるが、ナデにより不明瞭で単位は分からないため可能性に留めておく。縦瓦縁には、凹面側からの切断分割痕を残す。

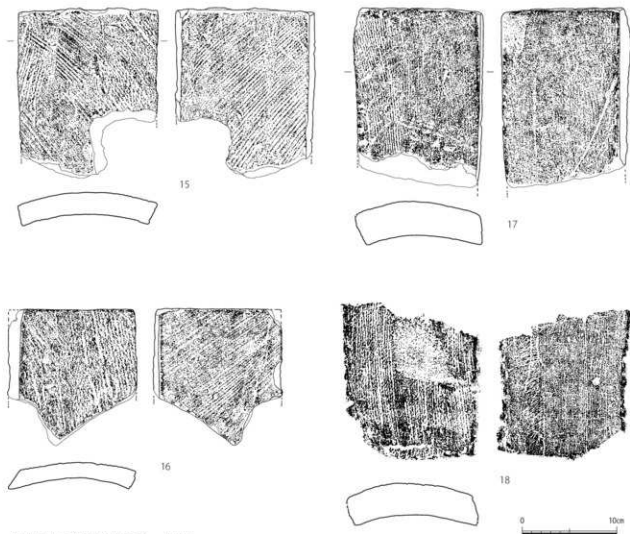
面戸瓦 (第29図)

完形に近い資料を2点抽出した。いずれも包含層3層出土。出土した破片資料も極めて、全て蟹面戸であると判断している。

19は横長辺17.7cm、短辺9.0cm、縦14.5cm、高さ5.3cm、厚さ1.2cm～1.6cmを測り、色調は暗黒色。縦瓦縁となった丸瓦径は16.8cmと推定される。凸面側は糸切り痕跡が見えるがナデにより平滑に仕上げる。凹面布目圧痕は3cm単位で経糸27本、緯糸26本で、糸切りを施す。周縁部分は丁寧なヘラ切りにより面取り調整を行っているが、一部に整形用細線状が残っている。20は横長辺17.0cm、短辺9.4cm、縦15.9cm、高さ5.3cm、厚さ1.9cm～2.1cmを測り、色調は暗黒色。原体となった丸瓦径は19.6cmと推定される。凸面側は縄目が見えるがナデにより平滑に仕上げているため不明瞭。凹面布目圧痕は3cm単位で経糸21本、緯糸27本で糸切り痕跡は見当たらず、ナデ作り。周縁部分は丁寧なヘラ切りにより面取り調整を行っているが、長辺面取り部分にやや太めの線、その他の周縁には細線状が部分的に残されている。

平瓦 (第29図)

最も多くの資料が出土しているが、破片が多く全体の分かる2点を抽出した。いずれも瓦溜り層出土。21は残存長33.3cm、残端部25.8cm、厚さ2.2を測り、色調は暗灰黄色。凸面側は布目圧痕を全面に残し、縄目は3cm単位で12本、凹面は布目圧痕の後、糸切りが施されているが、器面磨滅により不明瞭である。なお、模骨痕跡がないことから一枚作り瓦である。22は残存長33.3cm、残端部23.6cm、厚さ3.2を測り、色調は淡黒色。



凸面側は布目痕跡を全面に残し、縄目は3cm単位で9本、凹面は布目圧痕の後、糸切りが施されるが、器面磨滅により不明瞭である。幅4cm程度の横骨痕跡も確認できる。外周縁部はナデにより仕上げているが、狭端面は指オサエ痕跡が顕著である。

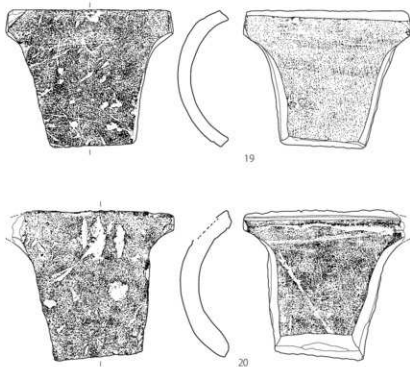
おわりに

ここでは、当遺跡の中核となる古代を中心として遺構、包含層、遺物についてその時期を明確にし、情報を基に時系列に沿った遺構等の整理を試みる。

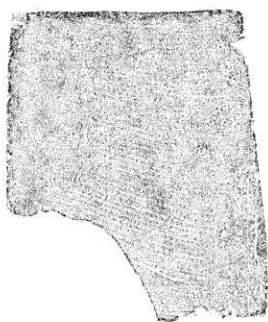
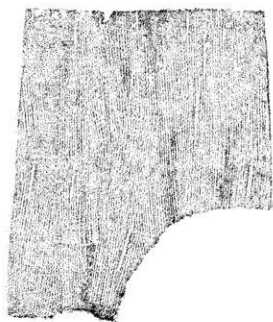
6号溝の時期

包含層3層(1~6層)出土土器

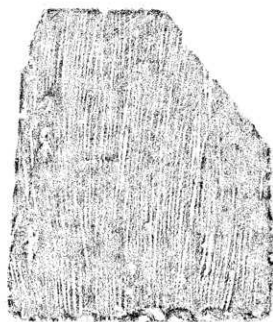
1須恵器坏蓋は形骸化した鴨状口縁、内面の低い縁。3須恵器内面碗は小型でシャープな作り。8世紀中頃~後半。2



第28図 製斗瓦・面戸瓦実測図(1/4)



21



22

須恵器坏身は形骸化した高台が端部に移動、体部が外反。8世紀末～9世紀初頭。

7層出土土器

5須恵器坏蓋は嚙状口縁。8世紀前半。
6須恵器坏蓋は口唇部がやや丸みのある嚙状、内面の縁が強い。4・7須恵器坏蓋は口唇部が丸く玉縁状、揃みの粗略化。8世紀中頃～後半。

8層出土土器

9須恵器坏蓋は内傾するかえり。7世紀後半。10～12須恵器坏蓋でボタン状揃みに嚙状口縁。13須恵器皿は口縁部が外湾し口唇部を丸く納める。8世紀前半と中頃から後半にそれぞれ位置付けが、極端的に古く中頃までに納まる。

9層出土土器

14須恵器高坏は口縁部の強い屈曲、口唇部が鋭利。8世紀中頃までに納まる。整理すると、包含層3層(1～6層)が8世紀末～9世紀初頭、7層は8世紀中頃～後半、8層以下が溝の時期で8世紀前半～中頃までに納まる。

1号溝の時期

1号溝の埋土中より出土。1須恵器坏蓋は口唇部が丸く玉縁状。8世紀中頃～後半。2・3須恵器坏蓋は口縁部が折り曲げずに直線的、形骸化した口唇部。8世紀末～9世紀初頭(溝が埋まる時期)。

道路状遺構の時期

1土師器小皿は13世紀の後半。2・3白磁碗は白磁皿類⁽²⁾で12世紀後半。4瓦質三足土器は中世の所産⁽³⁾。遺構は12世紀後半～13世紀後半。

包含層の時期

包含層2層

1須恵器坏蓋の揃みはやや偏平な宝珠状。7世紀後半。2須恵器坏蓋の揃みはやや高いボタン状。8世紀中頃～後半。
3須恵器坏蓋は嚙状口縁。8世紀前半。
4須恵器坏蓋は鋭利さを欠く嚙状口縁。
5須恵器坏蓋は嚙状口縁の先端が平坦化、低い内面の縁。6・7須恵器坏蓋は口唇部が玉縁状。8世紀中頃～後半。8須恵器坏蓋は転用碗、扁平な宝珠状揃み部が体部に落ち込む。8世紀前半。9須恵器高台付坏身は高台が外に張る。8世紀中頃～後半。11須恵器高台付坏身は

転用碗、高台が張るがやや低い。8世紀中頃～後半。13須恵器短須恵と14須恵器甕は口縁部を肥厚させて有段とする。8世紀中頃～後半。15黒色土器A類(内黒土面)は底部削り出しの断面三角形。緑釉陶器の底部に類似。9世紀代。18緑釉陶器碗は良品。9世紀代。19陶器の瓶もしくは壺は輸入陶器、類例に乏しい。大坂府藤井寺市小山遺跡では、統一新羅時代の緑釉小壺が出土⁽⁴⁾。表面の複数の隆帯は類似、文様を刻む点は異なる。白井克也氏は当出土例の隆帯に關し、8世紀以降の出現⁽⁵⁾と記す。2層は8世紀後半代と9世紀代の遺物が得られている。特に、後者の頃の情報がなく出土量は僅かである。

包含層3層

1須恵器坏蓋は嚙状口縁、内面の縁と口縁部の屈曲が強い。8世紀前半の新相。2須恵器高台付坏身は、やや高い高台を端部に付す。8世紀末～9世紀初頭。3須恵器高台付坏身は体部下端が稜となる。高台は高く張る。4須恵器高台付坏身は体部下端が稜。内側に付された高台は低い。8世紀中頃～後半。5須恵器高台付坏身は体部下端が鋭利な稜、高台は低く外側に付す。8世紀末～9世紀初頭。6須恵器高台付坏身は体部下端の稜が不明瞭。高台は細身で端部に付される。8世紀末～9世紀初頭。7須恵器高台付坏身は体部下端が鋭利な稜。幅広で低い高台を外側に付す。8世紀末～9世紀初頭。

整理すると8世紀末～9世紀初頭。中でも2・5・7はやや古く、6は新しいという印象を受け、6号溝の2須恵器坏身と同じ印象を受けるが、ここでは、8世紀末～9世紀初頭とする。

包含層4層

1須恵器坏蓋は内面内側に鋭利なかえり。7世紀後半。2須恵器坏蓋は嚙状口縁、内面の明確な稜。8世紀前半。3須恵器坏蓋は鋭利さを欠く嚙状口縁、内面の不鮮明な稜。8世紀前半の新相。4は須恵器高坏もしくは地。7世紀後半。6須恵器皿は口縁部が強く外反、下端部に稜。8世紀中頃～後半の古相。7赤土土器の短須恵は厚手の扁球形胴部で下平が下膨れ、高台は高く外方に強く張る。7世紀後半～8世紀初頭。その他、新しい須恵器も少量混じっており、4層が不安定な事情を反映する。

瓦の年代観

瓦は太宰府市の類軒平瓦642A型式と軒丸瓦241型式のセット関係にあり、鴻巣館系の中でも最も新しい。出土例は軒平瓦が筑前国分寺、国分尼寺、多々良込田遺跡、海の中道遺跡、軒丸瓦は筑前国分寺、多々良込田遺跡と限定的で、出土量は筑前国分寺の場合、古式2タイプが18～36%を占めるが、同タイプは3%未満と僅か⁽⁶⁾。鴻巣館1式が7世紀末～8世紀初頭、次が8世紀中頃とされ、最後出の当資料は8世紀の中頃から後半期となるが、型式の推移と時間を考慮し先行タイプが中頃⁽⁷⁾とのことから、後半寄りに重心が置かれると考える。

遺構、包含層、瓦の時期

包含層2層=9世紀代

包含層3層=8世紀末～9世紀初頭

包含層4層=7世紀後半～8世紀前半(不安定)

SD-6の7層(北壁9層)=8世紀中頃～後半【土壇状遺構・1号溝等の構築】

1号溝=8世紀末～9世紀初頭

6号溝=8世紀前半～中頃

道路状遺構=12世紀後半～13世紀後半

瓦溜り=9世紀初頭～前半

2層上層の瓦溜り=9世紀後半

瓦=8世紀中頃～後半(後半寄り)

時系列的遺構等の形成

8世紀前半～中頃=6号溝構築と廃棄

8世紀中頃～後半=占有地の区画が菜里方向から正方位へ変化

・SD-6の7層(北壁9層)の充填と平坦化
・溝から土塁(築地)へ【区画手法の変化】
・掘立柱から瓦葺石へ【構造物の変化: 総瓦葺、白壁、赤塗り部材】
7層: 8世紀中頃～後半

瓦: 8世紀中頃～後半(後半寄り)

8世紀末～9世紀初頭=整地(包含層3層)
・規模の縮小・建物の整理【開引き: 瓦、白土(漆地)の混入】

9世紀初頭～前半=瓦溜り

・大規模な建物群の喪失

9世紀代=縮小しながらも継続
・輸入陶器、緑釉陶器、黒色土器

現状では以上の流れとなろう。

最後に課題点を提示する。

①補修用と解される瓦が大量かつ限定的に使用された理由。

大宰府分類軒平瓦 642 A 型式と軒丸瓦 241 型式瓦葺は、極めて限定的な遺跡敷と出土量等から「補修用に製作されたと思われる。」⁽⁹⁾と解釈されている。

1: 当施設の重要度や位置づけからくるもので、当時の格付けによる対応。

2: 大規模改修を行うにあたって工事自体急務とされたため、当時製作されていた既存の瓦での対応。

以上、2点を掲げてみた。

② 8世紀末～9世紀初頭における整地(包含層3層)の理由

瓦は型式と組み合わせが一つ、その後の供給が追えない現状で、新たな建物構築とも考えにくい。瓦の廃棄をみると同層を含め3回ほど見受けられる。これを段階的な建物群の喪失と捉え、全体規模の縮小に関連したような建物群の引き等整理事業の一環として整地を捉える。

③ 継続を含めた下限の問題

建物群の廃絶が9世紀初頭～前半の瓦溜りの時期と考えるが、包含層の2層か

らは少量ながら輸入陶器や緑釉陶器、黒色土器を得ており、断片的ながら現状では9世紀代の継続も考えられる。

④ 「門」という墨書

「門」という墨書は2007年度までに福岡県内で3ヶ所が記載されている⁽¹⁰⁾。森貞次郎氏により「官道線に沿って門らしき痕跡があり、その周囲から多量の瓦が出土した」と報告されている⁽¹⁰⁾が、推定の官道ラインは当該遺跡の東側にあたり、墨書土器は発掘区東側の土塁状遺構より内側で出土している。「門らしき痕跡」の位置は不明だが、官道線に沿う点では東側となろう。東門の存在と墨書との関連が気になることである。

註

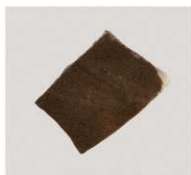
- (1) 勝部 衛「松江市東区町後原遺跡出土の亀甲状石について」『鳥根考古学会誌3集』鳥根考古学会 1986
- (2) 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4集九州歴史資料館 1978
- (3) 小田富士雄・藤久嗣郎「防長地方の中

世土鼎」『九州考古学15』九州考古学会 1962

- (4) 開館20周年特別企画展「日本の三彩と緑釉—天に咲いた華—」愛知県陶磁資料館 1998
- (5) 白井克也「日本出土の朝鮮産土器・陶器」『日本出土の舶載陶磁』東京国立博物館 2000
- (6) 森田勉「筑前国分寺」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集—』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995
- (7) 註(6)に同じ。
- (8) 森田勉「西海道国分寺」『大宰府陶磁器研究—森田勉氏遺稿集—』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会 1995
- (9) 服部一隆・柴田博子編「福岡県出土墨書・刻書土器集成」『古代学研究紀要』号2009明治大学古代学研究所
- (10) 福岡市教育委員会「多々良込田Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書 53集 1980



第6号溝(包含層3層)出土門面視3



包含層2層出土緑釉陶器 18



包含層2層出土陶器 19



包含層3層出土「門」黒書土器7

図版



製斗瓦と面平瓦



調査区全景(西から)



第3号溝横出状況(北西から)



第4号・6号・9号壁穴住居完掘状況(西から)



柵・第3号溝・壁穴住居群(西から)



土塁状道柵・道路状道柵横出状況(南から)



瓦溜り出土状況



第6号溝上層断面状況(西から)



土塁状遺構横出状況(南東から)



土塁状遺構互層積上坪部分上層断面状況(東から)



旧石器1



縄文石器2



第9号型穴式住居出土石製品 10



第3号溝出土石製品5



軒丸瓦 1



軒丸瓦 4



軒丸瓦 5



軒丸瓦 2



軒平瓦 10



軒平瓦 14



軒丸瓦 3



軒平瓦(未報告)



軒平瓦(未報告)



軒平瓦 8



軒平瓦(未報告)



軒平瓦 12



軒平瓦 9



軒平瓦 11



軒平瓦 13

報告書抄録

ふりがな	うちはしつばみいせき3じ							
書名	内橋坪見遺跡3次							
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	福島日出海、新宅信久、西垣彰博、児玉駿介							
編集機関	粕屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2015年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内橋坪見遺跡3次	福岡県糟屋郡粕屋町 大字内橋字辻寺248番4、 254番1	403491	280081-3	33° 37' 20"	130° 27' 44"	2014.5.12 ～ 2014.7.25	約240㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
内橋坪見遺跡3次	集落 官衙	旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良時代	土塁状遺構、溝、櫓、 竪穴住居	土師器、須恵器、瓦、石器		推定古代官道の隣接地から多量の瓦が出土。		
要約	<p>古代官道に隣接し、長舎型建物や大宰府式瓦瓦等が出土した内橋坪見遺跡1次調査と一連の遺跡である。長舎型建物を囲う溝と櫓を検出した。これら主要施設は条里地割に沿っているが、8世紀中ごろから後半にかけて土地区画の大規模な改編が行われ、施設の主軸が条里方向から正方向に変化している。また、それに伴って建物の瓦葺化も行われている。これらを証左するように、正方位の土塁状遺構と総重量400kg近くに及ぶ多量の瓦が出土している。</p>							

内橋坪見遺跡3次 粕屋町文化財調査報告書第38集

平成27年3月31日 発行

発行 粕屋町教育委員会
〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）
TEL: 092-939-2984 FAX: 092-938-0733

印刷・製本 株式会社九州カスタム印刷
〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵3丁目16-15
TEL: 092-414-7554 FAX: 092-414-7560